

日本薬学会 第146年会(大阪)

年会ハイライト集

2026年3月26日(木)~29日(日)
関西大学 千里山キャンパス

ファーマシンフォニーが奏でる未来
~やってみいひん? 薬学イノベーション!~

The future orchestrated by "Pharma-Symphony"
~Wanna try it? (Yatte miihin?) Innovation in Pharmacy~

ご挨拶

日本薬学会第 146 年会は、「ファーマシンフォニーが奏でる未来～やってみいひん？薬学イノベーション！～」をテーマとして 2026 年 3 月 26 日（木）から 29（日）までの 4 日間、関西大学千里山キャンパス（大阪府吹田市）にて開催されます。本年会では、物理系、化学系、生物系、医療系、臨床系をはじめとする薬学の幅広い学術領域の研究者が一堂に会します。異なる専門性が響き合い、新たな価値を創出する「シンフォニー」の場として、分野横断的な議論を通じた連携の深化と、次世代の薬学イノベーションの芽が生まれることを期待しています。

本年会では、会頭講演を皮切りに、ノーベル賞受賞者の講演を含む 16 演題（海外 4 件、国内 12 件）の特別講演の他、受賞講演 24 演題、最新の研究成果が集まった計 92 セッション 450 演題のシンポジウム（理事会企画シンポジウム、組織委員会企画シンポジウム、一般シンポジウム、および大学院生シンポジウム等）が予定されています。また、一般学術発表（口頭発表 1049 演題、ポスター発表 2244 演題）では、幅広い薬学領域をカバーする最新の研究成果が発信されます。

本ハイライト集は、日本薬学会広報委員会のご協力のもと、シンポジウム演題を中心に取りまとめました。各講演の要点を簡潔に紹介するとともに、グラフィカルアブストラクトを用いた視覚的に理解しやすい解説も掲載しています。本冊子が、年会の見どころ・聴きどころを俯瞰し、議論をより実りあるものとするための指針となれば幸いです。

日本薬学会第 146 年会 組織委員長 小比賀 聡

日本薬学会は研究者、製造業者、薬剤師、行政、学生など、くすりに関わる様々な立場の会員が所属する学会です。日本全国に広がる 8 の支部と、薬学の多様な分野をカバーする 10 の部会があり、普段はそれぞれの支部・部会を中心として活動しておりますが、毎年 3 月末に開催される日本薬学会年会は、全ての支部・部会の会員が一堂に会し、それぞれの専門を超えた形で融合する大切な会となっております。その中でも年会で開催されます多数のシンポジウムは、今まさに注目される研究分野、研究動向を拓けるべく、理事会、組織委員会だけでなく、学生会員を含む幅広い会員により企画・開催されます。本年会ハイライト集では、第 146 年会で企画されています様々なシンポジウムをご紹介します。幅広い分野の研究者が集まる年会の性質を反映し、専門家だけでなく幅広い方に、それぞれの研究分野の面白さ・大切さが伝わるように、編集を心がけました。一般の方や報道関係者におかれましても、本冊子を通して薬学に触れ、楽しんでいただければ幸いです。

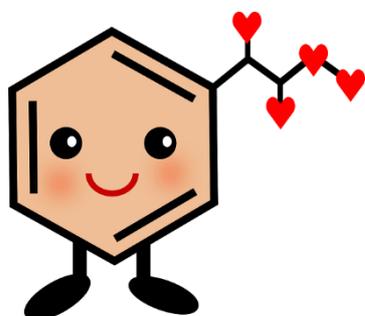
最後になりましたが、本冊子の制作にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

公益社団法人日本薬学会 広報委員長 横島 聡

日本薬学会第 146 年会ハイライト

目 次

2026 年度学会賞受賞者・受賞講演日時	1
日本薬学会第 146 年会特別講演等プログラム	7
シンポジウム グラフィカルアブストラクト	9
国際交流シンポジウム / 本部企画シンポジウム /	
組織委員会企画シンポジウムジョイントシンポジウム /	
一般シンポジウム	
一般学術発表系別演題数	67
キーワード一覧	68



日本薬学会キャラクター ドリン君

2026 年度日本薬学会 学会賞受賞者・受賞講演日時

薬学会賞受賞者（応募 7 件、授賞 4 件）

薬学の基礎および応用に関し、本学会を代表するに足る研究業績をあげ、世界の学術進歩に著しく貢献した研究者



加藤 晃一

（自然科学研究機構 教授）

「バイオ医薬応用を志向した糖タンパク質の統合的生命分子構造学」

2026 年 3 月 27 日（金）14:20 ～ 15:20

第 01 会場（BIG ホール 100 第 2 学舎 4 号館 F 棟（1F））



清水 敏之

（東京大学大学院薬学系研究科 教授）

「自然免疫センサーにおけるリガンド認識および活性制御機構の構造科学的解明」

2026 年 3 月 28 日（土）9:30 ～ 10:30

第 01 会場（BIG ホール 100 第 2 学舎 4 号館 F 棟（1F））



玉村 啓和

（東京科学大学総合研究院生体材料工学研究所 副学長/教授）

「ペプチド・ペプチドミメティックを基盤とした創薬・ケミカルバイオロジー研究」

2026 年 3 月 29 日（日）9:30 ～ 10:30

第 01 会場（BIG ホール 100 第 2 学舎 4 号館 F 棟（1F））



山崎 浩史

（昭和薬科大学 教授）

「薬物の代謝、体内動態と薬効毒性に関するデータ駆動型研究」

2026 年 3 月 27 日（金）16:40 ～ 17:40

第 01 会場（BIG ホール 100 第 2 学舎 4 号館 F 棟（1F））

学術貢献賞受賞者（応募 1 件、授賞 1 件）

薬学の基礎および応用に関し、各専門部門で優れた研究業績をあげ、薬学の発展に顕著な貢献をなした研究者

第 1A 部門 有機化学 第 1B 部門 生薬・天然物化学、医薬品化学

第 2 部門 分析化学、物理化学、アイソトープ・放射線科学

第 3 部門 生物化学、微生物科学

第 4A 部門 薬剤学・製剤学、医療薬学 第 4B 部門 衛生化学、薬理学

第 4B 部門



鍛冶 利幸

（東京理科大学 名誉教授）

「血管の毒性学の開始と展開を通じた衛生薬学研究への貢献」

2026 年 3 月 28 日（土）14:10 ～ 15:00

第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））

2026年度日本薬学会 学会賞受賞者・受賞講演日時

学術振興賞受賞者（応募7件、授賞5件）

薬学の基礎および応用に関し、各専門分野で優れた研究業績をあげ、その振興に寄与し、世界的にも注目される発展性のある研究者

- 第1A部門 有機化学 第1B部門 生薬・天然物化学、医薬品化学
第2部門 分析化学、物理化学、アイソトープ・放射線科学
第3部門 生物化学、微生物科学
第4A部門 薬剤学・製剤学、医療薬学 第4B部門 衛生化学、薬理学

第1A部門



澤間 善成

（大阪大学大学院薬学研究科 教授）

「枯渇しない資源の水と鉄、ならびに水素を活用する精密分子構築法の開発」

2026年3月27日（金）14:50～15:30
第02会場（E101 第2学舎3号館 E棟（1F））

第1B部門



出水 庸介

（国立医薬品食品衛生研究所有機化学部 部長）

「二次構造制御を基軸としたペプチド創薬研究」

2026年3月27日（金）15:40～16:20
第02会場（E101 第2学舎3号館 E棟（1F））

第2部門



長瀬 健一

（広島大学大学院医系科学研究科 教授）

「機能性高分子を用いた医薬品分離分析と再生医療の創出」

2026年3月27日（金）10:10～10:50
第02会場（E101 第2学舎3号館 E棟（1F））

第4A部門



山田 勇磨

（北海道大学大学院薬学研究院 教授）

「細胞移植療法を加速するミトコンドリア活性化細胞の製造」

2026年3月27日（金）14:00～14:40
第02会場（E101 第2学舎3号館 E棟（1F））

第4B部門



白川 久志

（京都大学大学院薬学研究科生体機能解析学分野 准教授）

「中枢神経系疾患における TRP チャネル群の分子薬理学的研究」

2026年3月27日（金）13:10～13:50
第02会場（E101 第2学舎3号館 E棟（1F））

2026 年度日本薬学会 学会賞受賞者・受賞講演日時

奨励賞受賞者（応募 20 件、授賞 8 件）

薬学の基礎および応用に関し、独創的な研究業績をあげつつあり、薬学の将来を担うことが期待される研究者



川口 祥正

（京都大学化学研究所 助教）

「高分子医薬の細胞内送達基盤設計と展開」

2026 年 3 月 29 日（日） 11:10 ～ 11:40
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））



岸本 真治

（静岡県立大学薬学部 講師）

「病原性糸状菌の多彩な二次代謝機構の解明」

2026 年 3 月 28 日（土） 15:50 ～ 16:20
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））



木村 真也

（明治薬科大学 講師）

「自己集合性低分子の合理的設計に基づく新規機能性超分子ゲルの創出：医薬への応用と形成メカニズム解明」

2026 年 3 月 28 日（土） 16:30 ～ 17:00
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））



田良島 典子

（徳島大学大学院 医歯薬学研究部(薬学域) 准教授)

「幅広い分子階層を有する核酸モダリティに対する創薬化学的研究」

2026 年 3 月 28 日（土） 17:10 ～ 17:40
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））



友重 秀介

（東北大学大学院 生命科学研究科 助教）

「生体高分子恒常性への化学介入に基づく次世代創薬化学基盤の創出」

2026 年 3 月 28 日（土） 15:10 ～ 15:40
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））



服部 倫弘

（中部大学 特任准教授）

「無保護アミノ酸による環状アミノ酸の形成および環状ペプチド両末端・側鎖へのマルチ伸長反応の開発」

2026 年 3 月 28 日（土） 9:30 ～ 10:00
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））

2026年度日本薬学会 学会賞受賞者・受賞講演日時



福田 達也

(和歌山県立医科大学 薬学部薬剤学研究室 講師)

「生体バリアの克服および中枢疾患治療を目的とした多様な DDS の開発」

2026年3月28日(土) 10:10 ~ 10:40
第02会場 (E101 第2学舎3号館 E棟 (1F))



松本 信圭

(東京大学大学院 薬学系研究科 助教)

「海馬が刻む「最期」と「最愛」」

2026年3月28日(土) 10:50 ~ 11:20
第02会場 (E101 第2学舎3号館 E棟 (1F))

女性薬学研究者奨励賞受賞者 (応募1件、授賞1件)

アカデミア領域においては教授・准教授を除く職位、医療現場においては部長・副部長を除く職位、企業においてはこれらに準ずる職位の女性研究者であり、薬学の基礎および応用に関し、優れた研究成果をあげた女性研究者で、これからも高い研究成果をあげることで薬学研究の発展に寄与するとともにキャリアアップが期待される女性研究者



田中 晶子

(神戸薬科大学 講師)

「口腔内または脳を標的とした経粘膜投与型ドラッグデリバリーシステムの開発」

2026年3月27日(金) 16:30 ~ 17:00
第02会場 (E101 第2学舎3号館 E棟 (1F))

創薬科学賞受賞者 (応募4件、授賞2件)

医薬品(診断薬・ワクチン、遺伝子医療、再生医療、リポジショニング等も含む)の創製により、医療に貢献した優れた研究業績をあげた者
あるいは医薬品の創製に関連した応用技術の開発・実用化により、医療に貢献した優れた研究業績をあげた者

「セロトニン・ドパミン アクティビティ モジュレーター (SDAM) ブレクスピプラゾールの創製」

受賞講演 2026年3月29日(日) 10:20 ~ 11:00 第02会場 (E101 第2学舎3号館 E棟 (1F))

2026 年度日本薬学会 学会賞受賞者・受賞講演日時



伊藤 展明



山下 博司



宮村 伸



前田 健二



菊地 哲朗

伊藤 展明（大塚製薬株式会社 創薬化学研究所 主任研究員）

山下 博司（大塚製薬株式会社 知的財産部）

宮村 伸（大塚製薬株式会社 研究管理部 課長）

前田 健二（大塚製薬株式会社 メディカル・アフェアーズ部）

菊地 哲朗（大塚製薬株式会社 医薬品事業部 シニアフェロー）

受賞理由

自社開発品に対するリバーストランスレーショナルリサーチを起点として、セロトニン・ドパミンアクティビティモジュレーターであるブレクスピプラゾールの創製に成功した。本剤は、その独自の薬理学的特性と優れた有効性・安全性により、精神疾患の治療に加え、アルツハイマー型認知症に伴うアジテーションへと適応を拡大し、幅広い臨床的価値を見出した。以上の薬剤開発ならびに適応拡大の成果は、創薬科学の発展に寄与するものであり、本創薬研究は創薬科学賞にふさわしい業績であると判断する。

「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対する DS-LNP-mRNA 技術を用いた「コロナウイルス（SARS-CoV-2）RNA ワクチン」の創製」

受賞講演 2026年3月28日(土) 13:10 ~ 13:50 第02会場 (E101 第2学舎3号館 E棟 (1F))



城内 直



田中 夏樹



丹羽 貴子



鈴木 貴

城内 直（第一三共株式会社 ワクチン研究所長）

田中 夏樹（第一三共株式会社 シニアディレクター）

丹羽 貴子（第一三共株式会社 プリンシパルサイエンティスト）

鈴木 貴（第一三共株式会社 プリンシパルサイエンティスト）

受賞理由

pH 応答性脂質を応用した自社独自の LNP（脂質ナノ粒子）技術に基づき、新型コロナウイルス RNA ワクチンの開発に成功した。本ワクチンは、新型コロナウイルス感染症予防に対して高い有効性を示すとともに、冷蔵条件下での安定的な流通を可能とする優れた特性を有する。今回確立されたワクチン技術は、今後の新興感染症に対応可能な汎用的プラットフォームとして、日本におけるワクチン開発の発展に大きく貢献した。以上の業績から本創薬研究は創薬科学賞にふさわしいと判断する。

2026 年度日本薬学会 学会賞受賞者・受賞講演日時

教育賞受賞者（応募 2 件、授賞 2 件）

全国あるいは地域レベルでの薬学教育に多大に貢献し、その進歩発展に特に功績のあった者



小澤 光一郎
（安田女子大学 教授）

「薬学教育 6 年制改革推進及び国際発信への貢献」

2026 年 3 月 27 日（金） 9:30 ～ 10:00
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））



望月 真弓
（慶應義塾大学 名誉教授）

「薬学生・薬剤師教育を通じた、一般用医薬品の普及とセルフメディケーション推進への貢献～地域医療の入口としての役割～」

2026 年 3 月 27 日（金） 17:10 ～ 17:40
第 02 会場（E101 第 2 学舎 3 号館 E 棟（1F））

佐藤記念 医療貢献薬剤師賞受賞者（応募 2 件、授賞 1 件）

医療現場で行われたヒトを対象とする臨床・疫学研究等において業績をあげ、医療の発展に貢献している薬剤師



村木 優一
（京都薬科大学 教授）

「臨床実践に基づく個別化治療とビッグデータ解析による感染症治療の最適化」

2026 年 3 月 28 日（土） 16:40 ～ 17:40
第 01 会場（BIG ホール 100 第 2 学舎 4 号館 F 棟（1F））

特別講演等プログラム

会頭講演

持続可能な未来を拓く薬学の挑戦

日本薬学会 会頭 石井 伊都子

3月27日(金) 09:30 ~ 10:30 [第01会場]

特別講演

PHOTOPHARMACOLOGY

Controlling Biological Activity with Light

Bernard L. Feringa (Stratingh Inst. Chem, FSE, Univ. Groningen)

3月27日(金) 10:40 ~ 11:40 [第01会場]

小胞体の機能と制御のダイナミクス

森 和俊 (京大高等研究院)

3月27日(金) 13:10 ~ 14:10 [第01会場]

AI/DX 駆動型創薬の未来

奥野 恭史 (京大院医)

3月27日(金) 15:30 ~ 16:30 [第01会場]

危険因子の機序解明に基づくアルツハイマー病の新規治療薬の開発

里 直行 (国立長寿医療研セ)

3月27日(金) 9:30 ~ 10:30 [第15会場]

クライオ電子線トモグラフィーによる脊椎動物鞭毛の非対称因子の同定

吉川 雅英 (東大院医)

3月27日(金) 10:40 ~ 11:40 [第15会場]

国産ゲノム編集技術の開発と社会実装に向けた課題

山本 卓 (広大ゲノム編集イノベセ)

3月27日(金) 13:10 ~ 14:10 [第15会場]

構造生理学から構造創薬への展開

藤吉 好則 (東京科学大総合研究院)

3月27日(金) 14:20 ~ 15:20 [第15会場]

Inorganic and Biologically Derived Nanotechnology for Biomedical Applications

David T. Leong

(Dept. Chemical and Biomolecular Engineering, National Univ. Singapore)

3月27日(金) 15:30 ~ 16:30 [第15会場]

核磁気共鳴法による膜タンパク質の機能解明

嶋田 一夫 (理研)

3月27日(金) 16:40 ~ 17:40 [第15会場]

Rewriting protein modifications

Christina M. Woo (Dept. Chemistry & Chemical Biology, Harvard Univ.)

3月28日(土) 10:40 ~ 11:40 [第01会場]

免疫研究と臨床応用～神経免疫代謝関連の話題を含めて～

熊ノ郷 淳 (阪大院医)

3月28日(土) 13:10 ~ 14:10 [第01会場]

Regnase-1：炎症、免疫、代謝を司るマスターレギュレーター

審良 静男 (阪大免疫学フロンティア研セ)

3月28日(土) 14:20 ~ 15:20 [第01会場]

老化細胞を標的とした免疫老化制御治療の開発

南野 徹 (順天堂大院医)

3月28日(土) 15:30 ~ 16:30 [第01会場]

The Role of BRIN's in Strengthening Indonesia's National Health Research Ecosystem

NiLuh Putu Indi Dharmayanti (Research Organization for Health, BRIN, Indonesia)

3月29日(日) 10:40 ~ 11:40 [第01会場]

これからの時代に求められる薬学人材を育むエコシステムの構築を目指して

森 和彦 (富山くすりコンソ)

3月29日(日) 9:30 ~ 10:30 [第15会場]

食品安全におけるリスク評価

祖父江 友孝 (内閣府食品安全委)

3月29日(日) 10:40 ~ 11:40 [第15会場]

国際交流シンポジウム

IS01	Frontiers in Synthetic and Medicinal Chemistry 2026 オーガナイザー 石川 勇人 (千葉大院薬)、上田 昌史 (神戸薬大)、 澤間 善成 (阪大院薬)、中川 秀彦 (名市大院薬)	
2026年3月28日 13:10 ~ 15:10 第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)		
<p>創薬は、多様な学術分野の知識が結びつくことで成り立つ学問である。その中でも有機化学は、医薬品のもととなる分子を設計・合成し、その性質や働きを理解するための基盤として、創薬研究を根底から支える重要な分野である。本シンポジウムは、有機化学を基盤とする化学系薬学部会と医薬化学部会が連携して開催する国際シンポジウムであり、有機合成化学と創薬化学の最前線に焦点を当てる。本シンポジウムでは、海外から1名、国内から2名の第一線で活躍する研究者を迎え、英語による講演を通じて世界的な研究動向を共有する。新しい分子のつくり方や、これまでにない分子構造の創出、さらには、創薬や生命現象の解明へとつながる研究など、分野を越えた議論を通じて、次世代医薬品の創製に貢献することを目指す。</p> <div style="text-align: center;">  <p>植物 微生物 化学合成 → 新規有用化合物の創出 → 創薬、生命現象の解明</p> </div>		
#最先端創薬化学	#最先端有機合成化学	#英語による講演

IS02	国際交流シンポジウム「薬理系薬学」 オーガナイザー 原 俊太郎 (昭和医大薬)、松沢 厚 (東北大院薬)、 山村 寿男 (名市大院薬)	
2026年3月28日 13:10 ~ 15:10 第04会場(第2学舎3号館 E棟 [3F] E301)		
<p>日本薬学会はアジアにおける薬学研究のプラットフォームになることを目指し、国際化に積極的に取り組んでいる。アジア各国との連携においては、アジア医薬化学連合 (AFMC) に1992年の立ち上げより関わり、現在も加盟団体の1つとして参加している。また、韓国薬学会 PSK、台湾薬学会 PST、タイ薬学教育コンソーシアム PECT と二国間協定を締結しており、以前の年会では国際シンポジウムとして「次世代薬学アジアシンポジウム」を開催してきた。さらに、グローバルな展開を目指し、アジア域外のドイツ薬学会 DPhG、カナダ薬学会 CSPS とともに二国間協定を締結している。日本薬学会からはこれら5カ国の薬学会に演者を派遣しているが、最近の年会では、これらの国々から幅広く演者を招聘し国際交流シンポジウムを開催している。今回の年会では、薬理系薬学部会にご協力いただき、薬理学・薬物治療学にフォーカスをあて、ドイツ薬学会 DPhG 会頭の Jaehde 先生をはじめ、台湾、タイ、カナダ、そして日本から各1名ずつ、5名のシンポジストによる講演を通じて、国際的な知見の交流を図りたい。</p>		
#薬物治療学	#薬理学	#国際交流

国際交流シンポジウム / 組織委員会企画シンポジウム

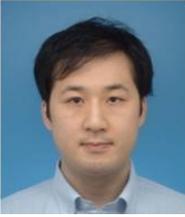
IS03	国際交流シンポジウム「生薬天然物学」 オーガナイザー 原 俊太郎（昭和医大薬）、森田 洋行（富山大和漢医薬学総合研）	
2026年3月28日 15:30 ~ 17:30		第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)
日本薬学会は、アジアにおける薬学研究のプラットフォームになることを目指し、韓国薬学会 PSK、台湾薬学会 PST、タイ薬学教育コンソーシアム PECT と二国間協定を締結しているほか、さらにグローバルな展開として、アジア域外のドイツ薬学会 DPhG、カナダ薬学会 CSPS とも二国間協定を締結している。日本薬学会からはこれら二国間協定を締結している 5 カ国の薬学会、ならびに医薬化学部会としてドイツ化学会のシンポジウムに、それぞれ演者を派遣しているが、逆に日本薬学会の年会には毎回、これらの国々から幅広く演者を招聘し国際交流シンポジウムを開催している。今回の年会では、薬理系薬学に関するシンポジウムに加え、生薬天然物部会にご協力いただき、生薬学・天然物化学にフォーカスした国際交流シンポジウムを企画しました。ドイツ、台湾、タイ、カナダ、そして日本から各 1 名ずつ、5 名のシンポジストによる生薬天然物学に関連した講演を通じて、国際的な知見の交流を図りたい。		
#天然物化学	#生薬学	#国際交流

OS01	日本の創薬力向上を考える オーガナイザー 小比賀 聡（阪大院薬）、水口 裕之（阪大院薬）	
2026年3月29日 09:30 ~ 11:30		第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)
本シンポジウムでは、日本の創薬力の現状を把握するとともに、今後の創薬力強化に向けた方策を多角的に議論する。近年、日本の創薬分野は世界における競争力の低下が指摘されており、基礎研究から臨床応用への橋渡し、産学官連携、人材育成、研究投資の在り方など、さまざまな課題を抱えている。本シンポジウムでは、永井良三先生（自治医科大学学長）、辻真博先生（JST CRDS フェロー）、近藤裕郷先生（医薬基盤・健康・栄養研究所理事長特任補佐）をお迎えし、それぞれの専門的視点から現状分析と今後の方向性についてご講演いただく。創薬力の再興に向けて、実効性のある提言と共通認識を形成する場としたい。		
#創薬		

本部企画シンポジウム

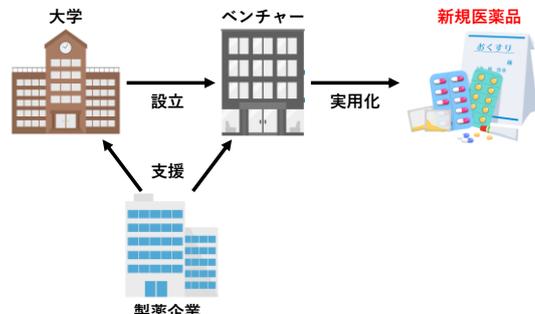
PS01	<p>第10回ダイバーシティシンポジウム 自分たちの夢をかなえるために： 先達の歩みとダイバーシティを支えるしくみ・しかけ</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 二木 史朗（京大院薬）</p>	
<p>2026年3月28日 09:30～11:30 第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)</p>		
<p>ダイバーシティシンポジウムは、日本薬学会年会において開催される理事会企画シンポジウムである。第10回となる今回は、「自分たちの夢をかなえるために：先達の歩みとダイバーシティを支えるしくみ・しかけ」をテーマに開催する。</p> <p>日本薬学会は、医薬品の創製や適正使用を支える学問技術の発展、関連する社会制度の構築、更にはそれらを担う人材育成を目的とする学術団体である。多様な立場の会員がダイバーシティを尊重し、積極的に交流・情報交換を行うことで、会員一人ひとりの活動の幅が広がり、更なる活躍へとつながることが期待される。本シンポジウムでは京都大学名誉教授・理化学研究所栄誉研究員の玉尾皓平先生および岐阜薬科大学名誉教授・特命教授の永澤秀子先生をお招きし、研究と家庭生活の両立を視野に、自らの「夢」を実現してきた歩みや、その過程で有効であった、あるいは必要と感じられた「しくみ」や「しかけ」について、男女共同参画の観点からご講演いただく。さらに、大阪大学ダイバーシティ&インクルージョンセンター・同大学院工学研究科教授の望月正人先生および日本製薬工業協会会長の宮柱明日香先生からは、大学および製薬企業における多様な人材の活躍を支援するための取り組みと今後の展望をご紹介いただく。</p> <p>本シンポジウムが、先達の経験に学びつつ、自らのキャリア形成とそれを支える環境づくりを考える契機となることを期待している。既に社会の第一線でご活躍の皆様はもとより、これから社会に羽ばたく学生・大学院生の皆様のご参加を心よりお待ちしております。</p> <div data-bbox="646 824 1437 1182" style="background-color: #008080; color: white; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">第10回ダイバーシティシンポジウム</p> <p style="text-align: center;">自分たちの夢を かなえるために</p> <div style="float: right; background-color: red; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center; color: white;"> <p>社会の第一線でご活躍の皆様 これから社会に羽ばたく学生の皆様</p> <p>来聴歓迎</p> </div> <div style="clear: both;"></div> <p style="text-align: center;">先達の歩みと ダイバーシティを支える しくみ・しかけ</p> <div style="background-color: yellow; padding: 5px; text-align: center;"> <p>開催日時・会場： 2026年3月28日（土）9:30-11:30 関西大学 第2学舎3号館 E棟 E201</p> </div> </div> <div data-bbox="646 1182 1437 1848" style="background-color: black; color: white; padding: 10px;"> <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;">  <div> <p>玉尾皓平 京大名誉教授・理研栄誉研究員</p> <p>男女共同参画は男性の意識啓発から</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;">  <div> <p>永澤秀子 岐阜薬大名誉教授・特命教授</p> <p>ワークライフバランス神話を超えて —女性科学者・無手勝流の流儀</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-bottom: 10px;">  <div> <p>望月正人 阪大D&Iオフィス・阪大院工教授</p> <p>大阪大学におけるDE&I推進の取組</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div> <p>宮柱明日香 日本製薬工業協会会長</p> <p>変革の時代をチャンスに —多様性と共創が拓く創薬の未来—</p> </div> </div> </div> </div> <div data-bbox="646 1848 1437 1928" style="text-align: center; padding: 5px;">  <p style="font-size: small;">公益社団法人 PSJ 日本薬学会 The Pharmaceutical Society of Japan</p> <p style="font-size: x-small;">日本薬学会第146年会(大阪) 理事会企画シンポジウム 日本薬学会ダイバーシティ推進委員会</p> </div>		
#ライフイベント	#ワーク・ライフ・バランス	#人材活躍支援

本部企画シンポジウム

<p>PS02</p>	<p>長井記念薬学研究奨励支援シンポジウム ～長井記念若手薬学研究者賞 授賞者からのメッセージ～ オーガナイザー 小暮 健太朗（徳島大）、水口 峰之（富山大院医学薬学）</p>	
<p>2026年3月29日 13:30～15:10</p>	<p>第16会場(第3学舎1号館 A棟 [1F] A101)</p>	
<p>日本薬学会では、学位を取得して将来の薬学の発展に寄与する強い意志を持った薬学研究者育成を目指して、会員が学位を取得するために研究に専念できる環境整備のために、長井記念薬学研究奨励支援事業を推進している。事業開始から10年が経過し、長井記念薬学研究奨励金を受領して学位を取得し、薬学研究者としての道に進まれた日本薬学会会員も出てきている。</p> <p>本シンポジウムでは、はじめに、岩淵 好治長井記念薬学研究奨励特別委員長による「長井記念薬学研究奨励支援事業の趣旨・歴史・現状等について」の後に、薬学研究奨励費を受領して学位を取得し、現在、薬学研究者として活躍されている長井記念若手薬学研究者賞受賞者から「採用により研究に対する取り組みがどう変化したのか」、「どのようなメリットがあったか」、「どのような研究を遂行してきたのか・しているのか」、「今後どのような研究者を目指したいか」など、広い角度からそれぞれの思いを込めてお話しいただく。最後に石井伊都子会頭に「創造的な探究の先に」を解説していただき、薬学会における「長井記念薬学研究奨励事業」の意義と成果を理解し、今後の方向性を広く確認する機会にしたいと考えている。</p>		
<p style="text-align: center;">長井記念薬学研究奨励支援事業：博士の学位取得のための研究専念環境設備</p>		
<div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;">  </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;"> <p>博士の学位取得を支援</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>薬学発展に寄与する 薬学教育者育成</p> </div> </div>		
<p>長井記念薬学研究奨励支援事業 2026年度長井記念若手薬学研究者賞受賞者</p>		
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>公文代将希</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>岡本 敬介</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>鹿山 将</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>李 大葵</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>安藤 栞</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>中島 孝平</p> </div> </div>		
<p>#薬学研究者育成</p>	<p>#博士学位取得</p>	<p>#若手薬学研究者</p>

ジョイントシンポジウム

JS01	<h2>第 21 回若手が拓く新しい薬剤学 ～バイオモジュールの創薬研究～</h2> <p>オーガナイザー 金沢 貴憲 (徳島大)、小出 裕之 (静岡県大)</p>	
2026 年 3 月 27 日 09:30 ~ 11:30	第 04 会場(第 2 学舎 3 号館 E 棟 [3F] E301)	
<p>近年、医療の世界では、これまで治療が難しかった病気に対し、新しいアプローチが生まれつつある。タンパク質や遺伝情報、細胞といった「生命のしくみ」そのものを活かす治療法が、その代表例であり、これらを医療として役立てるには、体の中で安全に保ち、必要な場所に確実に届ける工夫が不可欠となっている。そこで重要な役割を果たすのが、薬を設計し、体内での働きを巧みに調整するドラッグデリバリー技術である。本シンポジウムでは、生命のしくみを自在に操り、これまでにない治療の可能性を切り拓く若手研究者が集う。基礎研究から医療応用までをつなぐ最新の挑戦を通じて、未来の医療がどのように進化していくのかを考える場となることを目指す。21 回目を迎える本企画は、若手研究者自らが考え、社会に向けて発信する場となっている。日本薬学会および学術変革領域研究 (A)「高分子進化工学」とのジョイント企画として開催される。</p>		
		
#タンパク質	#好中球	#ミトコンドリア

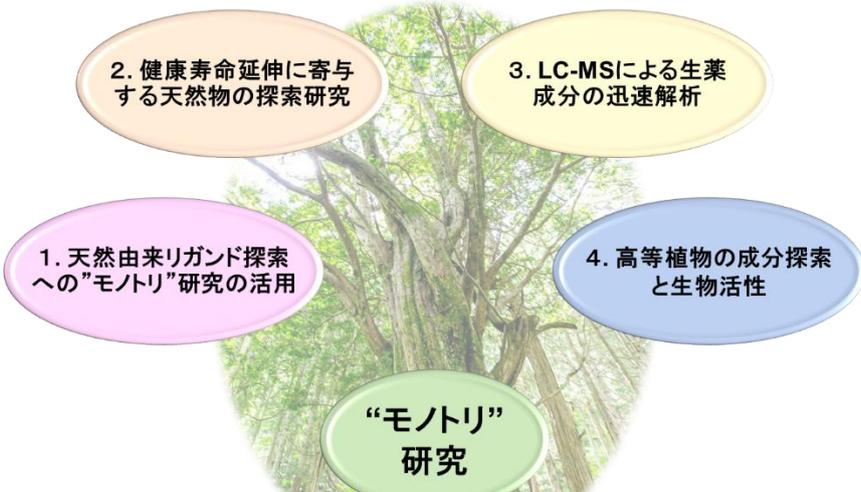
JS02	<h2>産学連携で切り拓くアカデミア発 DDS 技術の実用化</h2> <p>オーガナイザー 河野 裕允 (神戸薬大)、岡田 一志 (シオノギファーマ)</p>	
2026 年 3 月 27 日 09:30 ~ 11:30	第 05 会場(第 2 学舎 4 号館 F 棟 [4F] F401)	
<p>近年の医薬品開発においては、創薬ベンチャーが新薬創出の一翼を担っている。特に、核酸医薬や細胞医薬などに利用されている医療に革新をもたらした薬物送達技術(Drug Delivery System: DDS)は、大学や研究機関(アカデミア)の基礎研究の成果によるところが大きい。このことから、DDS 領域の創薬ベンチャーは今後ますます重要性が高まっていくと予想される。しかし、本邦におけるアカデミア発ベンチャー数は、2014 年度以降毎年増加しているにもかかわらず、アカデミア発の医薬品開発数は増加しておらず、アカデミアのシーズを創薬に十分に活かしてきていないのが現状である。この現状を打破するため、本シンポジウムでは、ご自身の DDS 研究の成果を社会実装するためベンチャーを設立されたアカデミア研究者と、それを支える企業研究者からご講演をいただき、産学連携に基づく創薬ベンチャーによるアカデミアの DDS 技術の実用化の現状と課題、将来展望について議論する。</p>		
		
#薬物送達技術(DDS)	#ベンチャー	#産学連携

ジョイントシンポジウム

JS03	<p>創薬と臨床に役立つ免疫毒性</p> <p>オーガナイザー 斎藤 嘉朗 (国立衛研)、立花 雅史 (立命館大生命科学)</p>	
<p>2026年3月27日 09:30 ~ 11:30 第18会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A202)</p>		
<p>免疫チェックポイント阻害薬など、ノーベル賞の成果を応用して、抗がん剤や自己免疫疾患の治療薬を開発する動きが活発化している。これらは免疫の働きを制御する一方で、他の医薬品や環境化学物質によって、意図せず免疫系が影響を受けることがある。免疫毒性学は、これらの現象やその機序を解明する学問であり、その専門学会として日本免疫毒性学会がある。本ジョイントシンポジウムでは、同学会に所属する薬学研究者が免疫毒性に関する知識や研究の重要性を日本薬学会会員の皆様と共有すると共に、薬学の一分野でもある免疫毒性学の発展に結びつくことを意図して企画した。内容としては、創薬・臨床における免疫学的副作用の概要、特異体質性副作用の実態や発症の予測、バイオ医薬品や核酸医薬品という新規モダリティの創薬における免疫毒性評価の現状や評価方法、ICH S8「医薬品の免疫毒性試験に関するガイドライン」の改訂に向けた議論の内容を紹介する。本シンポジウムを通じて、多くの薬学研究者や薬剤師、及びそれらを目指す学生の皆様が、免疫毒性学に興味を持っていただけることを期待する。</p>		
<p>ICH S8 医薬品の免疫毒性試験に関するガイドライン 低分子医薬品</p> <p>核酸医薬品 非天然型ペプチド医薬品</p> <p>ICH S6 バイオ医薬品</p> <p>一般的な免疫抑制・免疫亢進</p> <p>感受性・過敏症 予測困難 モダリティ特有の免疫毒性</p> <p>過敏症や新規モダリティを評価可能なガイドラインへ</p>		
#免疫毒性学	#新規モダリティ	#レギュラトリーサイエンス

JS06	<p>漢方薬 (和漢薬) が拓く薬学の未来 :</p> <p>和漢医薬でつながる基礎、臨床、そして、教育</p> <p>オーガナイザー 赤瀬 朋秀 (日本経済大院経営)、田嶋 公人 (城西国際大薬)</p>	
<p>2026年3月27日 15:30 ~ 17:30 第09会場(第2学舎1号館B棟 [4F] B401)</p>		
<p>漢方薬 (和漢薬) が現代医療で重要な選択肢として普及し、患者さんも漢方薬に関心を持たれるようになってきた。「漢方を理論的に使う薬剤師を育てる。」薬学部でも2002年から漢方医学を薬学教育の標準カリキュラムにも採録され、問題解決が試みられている。漢方薬はこれからは基礎と臨床、そして、それらを適切に扱うための薬学教育との繋がりにより十分な効果が得られると考える。</p> <p>本シンポジウムでは7名の先生をお招きして、漢方薬における基礎、臨床、そして、教育の3つの観点からご講演をいただく。そして、会場の皆様と漢方薬の魅力について語り合い、その見方が新たに変わることを確信している。</p>		
#漢方薬 (和漢薬)	#証 (漢方医学における基本理論)	#薬学教育

ジョイントシンポジウム

JS04	モノトリサイエンス アップトゥデート オーガナイザー 田村 理 (和医大薬)、中村 誠宏 (京都薬大)	
2026年3月27日 13:10 ~ 15:10	第16会場 (A101 第3学舎1号館 A棟 [1F])	
<p>“モノトリ (MONOTORI)”研究とは、狭義には植物・微生物・海洋生物など多様な生物が産生する天然有機化合物を見だし、それらを抽出・分離・精製したうえで化学構造を明らかにする一連の研究プロセスを指す。一方、広義には、生物活性評価を通じた活性天然物の探索や、得られた化合物の作用機序解明に向けた研究までを含む、より包括的な概念として捉えられている。“モノトリ”は天然物研究の中核を担う手法であり、この過程を経て得られる生物活性物質は、医薬品シーズとして有用であるのみならず、生命現象の理解を深める基礎研究に至るまで、多岐にわたる分野で重要な役割を果たす。また、特異な構造や独自の作用を示す天然物の発見は、新たな研究領域の創成を促すとともに、薬学にとどまらず幅広い分野の研究者が連携する学際的研究の発展につながる契機となることも多い。天然物が有する創薬的可能性や学術的価値を最大限に引き出すうえで、モノトリ研究は今後也不可欠である。</p> <p>今回のシンポジウムでは、独創的かつ実践的な戦略でモノトリ研究を推進し、新規天然物の探索・発見に顕著な成果を挙げている4名のシンポジストを迎える。それぞれ「天然由来リガンド探索への“モノトリ”研究の活用」、「健康寿命延伸に寄与する天然物の探索研究」、「LC-MSによる生薬成分の迅速解析」、「高等植物の成分探索と生物活性」といった多彩な演題で講演を行う予定であり、天然物研究の幅広さと奥深さを示す内容となっている。</p> <p>これらの講演では、新規天然物を発見する意義や研究過程の醍醐味、さらに研究を進めるうえで直面する課題や工夫について、具体例を交えてご紹介いただく。また、モノトリ研究が今後どのような方向性で発展すべきかについて活発な議論を行い、天然物研究のさらなる深化と発展につなげたいと考えている。</p>  <p>得られた生物活性物質は、医薬品シーズとしての有用性に加え、生命現象の理解を深化させる基礎研究に至るまで、多様な分野で重要な役割を担う。</p>		
#モノトリ研究	#天然有機化合物	#医薬品シーズ

ジョイントシンポジウム

JS05

「薬系博士人材養成の現状と今後の展開～薬系学会連合からの提案～」

オーガナイザー 高倉 喜信 (京大白眉セ)、望月 眞弓 (元慶應大)

2026年3月27日 15:30 ～ 17:30

第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)

日本薬系学会連合は2026年2月「報告：薬系博士人材養成の現状と展望」を発出した。この報告は文部科学省の「博士人材活躍プラン」に関するアンケート調査結果を踏まえて開催した第2回設立記念フォーラム「ともに語ろう薬学の未来～薬学研究者養成の課題と展望：さらなる活躍に向けて～」

(2025年3月に開催)で議論した内容をまとめたものである。この報告では、薬系博士人材養成の現状を改善するために以下の3つの提案をしている。

- (1) 学生の博士課程への進学意欲を増すための施策
- (2) 社会ニーズを反映した博士人材養成プログラム
- (3) 医療現場や他学部を含めた共同研究の推進

本シンポジウムでは、この「報告」における重要な論点を紹介すると共に製薬企業・医療機関における薬系博士人材の理想的なロールモデルや大学が進学率向上のために取り組むべき課題に関する話題をシンポジストから提供いただく。また、本シンポジウムは大学院生シンポジウム GS01 との合同シンポジウムとして同会場で連続して開催する。今回は、2つのシンポジウムの講演が終了した後、本シンポジウムのシンポジスト、大学院生シンポジウムに登壇した現役の博士課程大学院生および科学技術振興機構 (JST) からのパネリストを交えた合同パネル討論を行い、今後の薬系博士人材育成に関する展望について意見交換を行う。



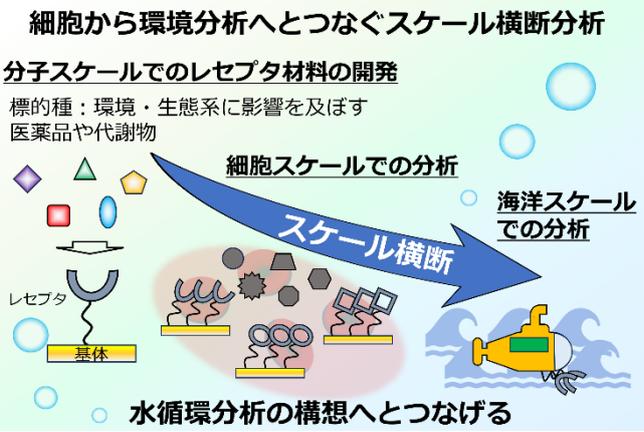
#日本薬系学会連合

#博士人材養成

#博士人材活躍プラン

ジョイントシンポジウム

JS08	<p>食品のリスク管理手法の最近の動向</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 穂山 浩（星薬大）、堤 智昭（国立衛研）</p>	
<p>2026年3月28日 09:30 ~ 11:30 第07会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F403)</p>		
<p>近年、食の安全性確保への社会的関心は一層高まっており、食品中に含まれる危害物質に対するリスク管理の重要性が増している。今回のシンポジウムでは、食品に関わる多様なリスク要因を対象とし、最新の管理手法とその課題について多角的に議論する。具体的には、植物性自然毒のピロリジジナルカロイド、生活環境中での汚染が問題視されている有機フッ素化合物（PFAS）、残留動物用医薬品、残留農薬、食品添加物といった多様なテーマを各演者が解説し、科学的知見と行政対応の現状を共有する。さらに、今後のリスク管理の方向性について参加者とともに考察し、食品の安全確保に向けたより効果的な取組の在り方を探る。</p> <p style="text-align: center;">多様な食品ハザードと最新の食品リスク管理手法</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>ピロリジジナルカロイド</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>有機フッ素化合物 (PFAS)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>残留動物用医薬品</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>残留農薬</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>食品添加物</p> </div> </div>		
#危害物質	#食品リスク管理手法	#安全性確保

JS10	<p>文科省科研費学術変革領域研究(B)「細胞から環境水へと繋ぐスケール横断分析」</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 東海林 敦（東京薬大）、南 豪（東大生研）、金 秀炫（東大生研）、福場 辰洋（海洋研）</p>	
<p>2026年3月28日 13:10 ~ 15:10 第18会場(第3学舎1号館 A棟 [2F] A202)</p>		
<p>薬学の発展により多くの疾患が克服され、人々の健康寿命の延伸に大きく貢献してきた。一方、医薬品の使用量の増加や新規化合物の多様化に伴い、それらが環境中に放出される機会が増えている。こうした医薬品やその代謝物が環境中でどのように残存し、生態および生体系にどのような影響を及ぼすのかが注目されている。我々は、水環境中に存在する標的種が生態および生体系に与える影響を明らかにすることを目的とし、分子サイズのレセプタを実装した化学センサを用いて、細胞レベルから海洋スケールに至るまでの階層的かつ網羅的な分析を行う「スケール横断分析」を提案してきた。この実現には多分野の連携が不可欠であるため、他学会で活躍する研究者の講演を通じて分野横断的な議論の場を設けた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">細胞から環境分析へとつなぐスケール横断分析</p> <p>分子スケールでのレセプタ材料の開発</p> <p>標的種：環境・生態系に影響を及ぼす医薬品や代謝物</p>  <p style="text-align: center;">水循環分析の構想へとつなげる</p> </div> <div style="width: 50%; text-align: right;"> <p>細胞スケールでの分析</p> <p>スケール横断</p> <p>海洋スケールでの分析</p> </div> </div>		
#スケール横断分析	#環境医薬品	#水環境分析

ジョイントシンポジウム

JS09

若手研究者が切り拓く、分野の垣根を越えた微生物研究

オーガナイザー 中南 秀将 (東京薬大薬)、松本 靖彦 (明治薬大)

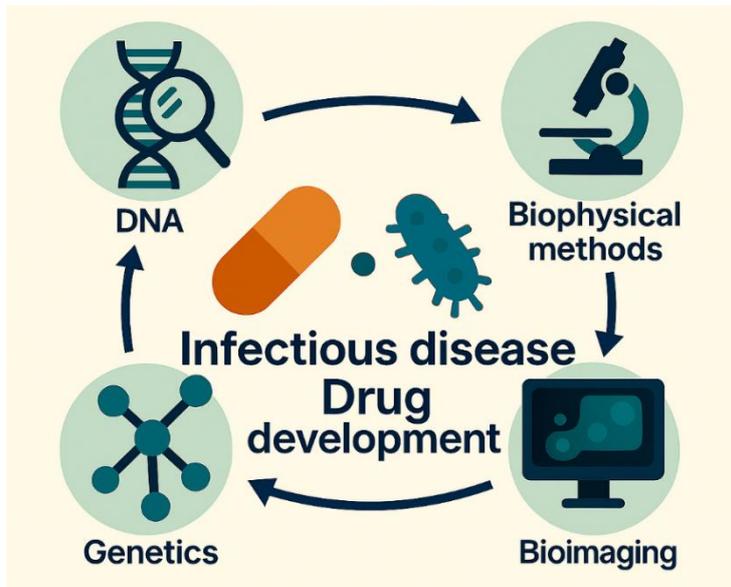
2026年3月28日 13:10 ~ 15:10

第06会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F402)

感染症は現在においても人類にとって克服すべき重要な課題であり、薬剤耐性菌の拡大や新興・再興感染症の出現により、その脅威は一層深刻化している。これらの問題に対処するためには、病原微生物の生物学的特性や病原性発現機構を深く理解するとともに、その知見を基盤とした診断法や治療法、さらには創薬への展開が不可欠である。微生物研究は薬学領域にとどまらず、医学、生命科学、理学、工学、農学など多様な分野と密接に関わる学際的研究領域であり、分野横断的な視点からの議論と連携が新たな研究展開を生み出す原動力となる。

本シンポジウムは、日本細菌学会関東支部会とのジョイント企画として開催し、各分野で活躍する若手微生物研究者が一堂に会し、最新の研究成果を共有することを目的とする。発表内容は、ヒトおよび動物由来病原細菌の病原性解析、宿主特異性や感染成立機構の解明、細菌や真菌が示す独自の細胞構造や運動機構、バイオフィーム形成を基盤とした集団としての振る舞いの理解など、多岐にわたる。また、薬剤耐性機構の分子基盤の解明を起点とした新規発現系の構築や、エンドトキシンフリー技術を含む創薬・産業応用への展開、さらには高感度かつ特異性の高い診断技術の開発に関する研究も紹介する。

これらの研究は、分子生物学、ゲノム解析、生物物理学、遺伝学、バイオイメージングといった多様な手法を駆使して進められており、微生物が示す巧妙な生存戦略や宿主との相互作用を多角的に理解することを可能にする。本シンポジウムを通じて、異なる専門分野の研究者間での活発な意見交換を促進し、新たな共同研究や研究テーマの創出につなげることを目指す。若手研究者ならではの柔軟な発想と先端技術を融合させることで、感染症研究の新たな方向性を提示し、将来的な感染症制御および薬学研究のさらなる発展に貢献する場となることを期待する。



#微生物研究

#異分野融合

#日本細菌学会

ジョイントシンポジウム

JS11	血管から読み解く「恒常性・老化・疾患」 ～血管生物学と薬学の融合視点を添えて～		
	オーガナイザー 岡田 欣晃（阪大院薬）、白倉 圭佑（阪大院薬）、		
2026年3月28日 15:30～17:30		第16会場(第3学舎1号館A棟 [1F] A101)	
<p>私たちの体には、血液を運ぶ「血管」がくまなく張り巡らされている。血管は、酸素や栄養を全身に届け、私たちの健康を支える重要な役割を担っている。しかし、血管の働きに異常が生じると、老化やさまざまな病気へとつながる。</p> <p>本シンポジウムでは、「血管」に注目し、健康な体を保つ仕組みや、加齢や病気との関わりについて、最新の研究成果を紹介する。日本血管生物医学会との共催のもと、第一線で活躍する研究者が、最新のイメージングなどの解析技術を用いて明らかになった血管の新しい役割や、血管を標的とした新しい治療法や薬の開発につながる研究について議論する。</p> <p>これまであまり注目されてこなかった「血管」という視点から、未来の医療や創薬につながる新しい可能性を探り、健康で長く生きる社会の実現に貢献することを目指す。</p>			
#血管生物学	#イメージング	#心血管創薬	

JS12	香粧品学と薬学のクロストーク ～薬学の知が拓く、機能性化粧品の開発と未来～		
	オーガナイザー 佐藤 隆（東京薬大薬）、東阪 和馬（阪大）		
2026年3月28日 15:30～17:30		第19会場(第3学舎1号館A棟 [3F] A301)	
<p>シミやシワなどの肌悩みをケアする機能性化粧品がその力を発揮するためには、配合成分を肌の狙った場所へ、効果が出る量だけの確に送り届ける必要がある。この「成分を必要な場所に届ける技術」は薬学が最も得意とする分野の一つである。また、成分の探索から、使い心地と効果を両立させる製品づくりの工夫、そして安全性の検証に至るまで、薬学の多彩な知見が深く関わっている。本シンポジウムでは、日本香粧品学会との共催により、機能性化粧品の開発における「薬学の知」の重要性を四つの柱から解き明かす。第一に、創薬科学の知見を活かした天然物からの原料「創出」、第二に、細胞や皮膚を用いた実験による「効果」の科学的な裏付け、第三に、動物を用いない新しい試験法による「安全」の科学的保証、第四に、製品使用後の副作用情報を品質向上に繋げる「信頼」のための安全性管理について、具体的な事例を交えて考察する。本シンポジウムにより、機能性化粧品の開発研究が薬学をはじめとする多様な科学の結晶であることを実感してもらえらるはずである。</p>			
#機能性化粧品	#薬学の知	#香粧品学	

ジョイントシンポジウム

JS13

薬学って、ええねん！ ～薬学出身者の多様なキャリアから薬学教育を考える～

オーガナイザー 永井 純也（大阪医薬大薬）、高橋 一栄（大阪府済生会野江病院薬）、
平野 智也（大阪医薬大薬）

2026年3月29日 09:30～11:30

第16会場(第3学舎1号館A棟 [1F] A101)

2006年に薬学部の6年制薬学教育が始まってから、約20年が経過した。この間、臨床薬学関連領域における教育や研究は一定の発展を遂げてきたが、まだこれから成長していく段階でもある。

薬剤師は国家資格であり、原則として6年制の薬学課程を修了した者だけが受験できる。これは、薬剤師が人の命や健康に直接関わる、高い専門性と責任を持つ仕事であることを意味している。しかし、薬学の学びは薬剤師になるためだけのものに留まるものではない。薬学は、薬の分子や細胞レベルの研究から、人のからだ全体、社会や地域、さらには法律や行政の仕組みにまで関わる、とても幅広い学問である。身近な医療の現場から、世界規模の健康問題まで、薬学は多くの場面で社会を支えている。

本シンポジウムでは、大学病院で働く薬剤師、自衛隊で活躍する薬剤官、国の研究機関の研究者、科学捜査に関わった経験を持つ研究者、起業家など、さまざまな道に進んだ薬学出身者5名が登場する。それぞれの体験談を通して、「薬学を学ぶとどんな仕事につながるのか」「薬学にはどんな可能性があるのか」を具体的に知ることができる。

また、現在の薬学教育についての思いや、これからの薬学がどのように社会と関わっていくのかについても、参加者と一緒に考える予定である。将来の進路に悩んでいる薬学生や高校生にとって、自分の可能性を広げるきっかけとなる場にしたい。

本シンポジウムは、若手研究者や教育者に加え、薬学生、大学院生、そして薬学に興味を持つ中学生・高校生の参加も歓迎している。「薬学って面白い」「薬学を学んでみたい」と感じられる機会となることを目指している。

本シンポジウムは、日本薬学会および日本薬学教育学会の共催により実施される。



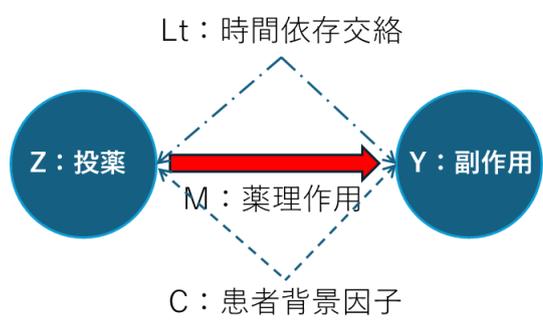
#薬学の面白さ

#薬学の教育と研究

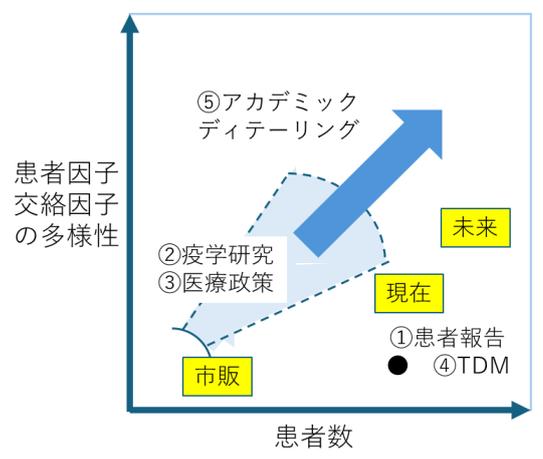
#薬学の多様なキャリア

ジョイントシンポジウム

<p>JS14</p>	<p>9月30日は医薬品安全にとって不名誉な日～日本のエビデンスを探せ～ オーガナイザー 高柳 和伸（倉敷中央病院薬）、小茂田 昌代（千葉西病院薬）、 宮崎 生子（帝京平成大薬）</p>		
<p>2026年3月29日 13:10～15:10</p>		<p>第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)</p>	
<p>2004年のこの日、メルク社はロフェコキシブが心筋梗塞と脳卒中のリスクを2倍に高めると発表し、同社は2000万人以上の患者に5年間使用された後にこの薬を市場から撤退させた。この事件は広く用いられている医薬品でも重大なリスクがあることを示し、世界中の医薬品安全性監視のあり方を見直すきっかけとなった。しかし日本では、今でもこれらの情報が患者と医療者、行政や製薬の領域でうまく共有できているとはいえない。そこで、この不名誉な歴史を振り返り今後の安全対策を考える、医薬品安全性学会とのジョイントシンポジウムを企画した。</p> <p>医薬品による副作用を回避するには、医薬品固有の薬理作用だけでなく、その薬物の吸収・分布・代謝・排泄に関わる患者背景因子や継続・中止・再開などの投薬に関わる因子等を適切に評価し管理する必要がある。ロフェコキシブの心血管リスクの発見が遅れた理由について、DAGを使って考察を試みる。</p> <p>医薬品は市販時には少人数の治験しか行っていないので限られた患者因子、交絡因子の評価に止まっている。市販後に患者数の増大に従ってその多様性も増加し、想定外のリスクも発生しやすくなると考えられる。このリスクを未然に回避するために以下の手法を提案する。</p> <p>個別アプローチ：①患者報告・④TDM 集団アプローチ：②疫学研究・③医療政策 統合アプローチ：⑤アカデミック・ディテールリング</p> <p>実は2006年に「9月30日は医薬品安全の不名誉な日」とNEJMに投稿したJerry Avorn博士はアカデミック・ディテールリングの生みの親である。</p> <p>上記①～⑤それぞれに対応して</p> <p>① 患者の声は私たち全てに届いているか？ ② 9月30日に米国で起きたこと ③ MIHARI Project を活用した医薬品安全対策 ④ アシクロビル脳症の予防・早期発見のために薬剤師ができること ⑤ 医師へのアカデミック・ディテールリングが処方最適化のエビデンス創出への順で講演し、今後の日本のエビデンス創出について考えてみたい。</p>			
<p>#ロフェコキシブ事件</p>		<p>#アシクロビル</p>	<p>#医薬品安全性</p>



DAGで読み解くロフェコキシブ事件



ジョイントシンポジウム

JS15	薬学の力で新たながん医療を切り拓く (第3回) ～新たな知見の創出に向けて～ オーガナイザー 池田 龍二 (宮崎大病院)、佐野 元彦 (星薬大)、藤田 行代志 (群馬がん薬)、三宅 知宏 (伊勢赤十字病院薬)	
2026年3月29日 13:10 ~ 15:10	第04会場(第2学舎3号館 E棟 [3F] E301)	
多くのがん患者は薬物療法に伴う副作用や心理的・経済的な問題を抱えている。臨床薬剤師は薬学の知識で問題を解決する中心的存在であり、患者背景や医薬品の情報収集・分析、多職種協働を通じて最適な薬物療法を提供することで、患者の満足度や生活の質 (QOL) の向上に貢献している。一方、医療現場ではエビデンス不足による諸問題も存在する。そのため、臨床薬剤師には日常診療から生じた臨床疑問 (Clinical Question; CQ) を研究疑問 (Research Question; RQ) へと発展させ、新たなエビデンスを構築することも求められている。		
本シンポジウムは、日本薬学会と日本医療薬学会が共同開催する第3回目のシンポジウムである。がん専門薬剤師、がん指導薬剤師、ならびにがん領域の研究者などの専門家が集い、臨床研究の重要性や新たなエビデンスの創出について議論する。CQ を RQ へ展開し論文化するための実践的工夫、質の高い臨床研究デザインの構築、創出エビデンスを臨床へ橋渡しするトランスレーショナル戦略について討議し、基礎研究と臨床をつなぐ「新たながん医療を切り拓く」契機となるシンポジウムを目指している。関連分野の研究者および臨床家の積極的な参加を期待する。		
#がん薬物療法	#がん専門薬剤師	#臨床研究

JS16	「第10回 臨床化学の進歩が変える薬物治療」～薬学×臨床化学×【+α】連携によるイノベーションで新たな価値創造へ～ オーガナイザー 城野 博史 (熊本大病院薬)、前川 正充 (東北大病院/東北大院薬)	
2026年3月29日 13:10 ~ 15:10	第05会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F401)	
臨床化学は、臨床検査の実践と研究開発を実践する学問領域である。ヒトの血液や尿などの検体を様々な技術を用いて分析し、病気の診断や薬の効果を調べる。また、検査技術の開発等により分析技術を高度化することで、より多くの生体情報を得ることが可能となる。それによって、臨床検査業務の改善のみならず、病気の原因や病態のメカニズムを新たに解明することも可能になる。このように臨床化学は、疾患の早期診断法、治療方法の開発・予防法の開発、昨今注目される個別化医療等の構築等に貢献するが、これには、薬学と臨床化学の共創が不可欠である。本シンポジウムは一般社団法人日本臨床化学会とのジョイントで開催し、早期診断・層別化や副作用検出等の新たな診断・薬物治療の実践につながる研究成果について議論する。臨床化学と薬学との融合的発展による医療イノベーションと、+αのさらなる価値創造の可能性について議論したいと考えている。		
#臨床化学	#分析技術	#バイオマーカー

ジョイントシンポジウム

<p>JS17</p>	<p>「臨床製剤専門薬剤師」認定制度の制定に向けて - 臨床製剤専門薬剤師に期待されるものとは？ - オーガナイザー 柏倉 康治 (帝京大薬)、花輪 剛久 (東京理大薬)、原田 努 (昭和医大臨床薬理研)、望月 勢司 (帝人リジェネット)、百 賢二 (昭和医大統括薬/病院薬)</p>	
<p>2026年3月29日 13:10 ~ 15:10 第06会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F402)</p>		
<p>医療機関において、薬剤師は調剤業務の延長行為として、錠剤の粉碎やカプセル開封による粉末化にとどまらず、溶解や懸濁、混和、希釈など、患者の状態や投与目的に応じた製剤の調製を日常的に行っている。さらに、市販化されていないが治療上の必要に応じて医療機関内で独自に調製されてきた製剤は「院内製剤」として発展してきた。</p> <p>我々は、製剤についてそれらの使用期限・保管条件の設定など、製剤の物理化学的検討による根拠に基づくことが必要と考え、院内製剤を医療機関に限らず全ての医療現場で調製・使用される「臨床製剤」に拡大し、より高品質な製剤の調製・提供について検討を重ねてきた。</p> <p>現在、院内製剤の調製、評価については「院内製剤の調製および使用に関する指針」が発表されているが、これに準拠し、質の高い製剤を安定的に提供するためには、より高度で専門的な知識・技能が求められる。</p> <p>本シンポジウムでは日本薬剤学会との合同企画とし、製剤調製に関わる薬剤師が Pharmacist-Scientist として、その能力をより発揮するための「臨床製剤専門薬剤師」認定制度の策定を提案する。本シンポジウムを通じ、講演者および参加者との議論を深め、認定制度の実現性について検討したい。</p> <div data-bbox="295 1077 1366 1888" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <h3 style="text-align: center;">「臨床製剤専門薬剤師」認定制度を提案する背景</h3> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">院内製剤（臨床製剤）は『薬剤師により調製され、医療機関内で全て使用される』</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 70%;"> <p>①調剤の準備を目的とするもの>>> 調剤の効率化</p> <p>②患者の治療・診断を目的とするもの>>>医療現場のニーズ・医師主導治療に応える</p> <p>③医療に用いるが患者の治療・診断目的ではないもの</p> </div> <div style="width: 25%; text-align: right;">  </div> </div> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">今後の院内製剤（臨床製剤）に求められる様々な項目</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;"> <p>臨床使用上の視点から・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・院内製剤の品質（安定性）の確立 ・院内製剤の有効性と安全性の確立 ・院内製剤の社会実装の可能性は？ <p>学術上の視点から・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・院内製剤のニーズの発掘 ・大学・医療機関の共同研究による新規院内製剤の提案 </div> <div style="width: 35%; text-align: right;"> <p>⇒ 臨床上のエビデンス</p> <p>⇒ 学術上のエビデンス</p> </div> </div> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px;">臨床製剤の調製は個別化医療を支援する上で益々重要な部分を担う</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 20%; text-align: center;">  </div> <div style="width: 75%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・「院内製剤の調製および使用に関する指針」の理解と実践 ・薬理学、薬剤学、製剤学に関する知識 ・院内製剤の実際の調製にかかる技能 <p style="text-align: center; color: red;">臨床製剤の調製に係るPharmacist-Scientistとして より高度で専門的な知識・技能の担保が必要</p> </div> </div> </div>		
<p>#臨床製剤</p>	<p>#臨床製剤専門薬剤師</p>	<p>#認定制度</p>

一般シンポジウム

S01	<p>フェンタニルの逆説：疼痛緩和と社会的危機のはざままで</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 徳山 尚吾（神戸学院大薬）</p>			
2026年3月27日 09:30～11:30	第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)			
<p>近年、「フェンタニル」という薬の名前を、海外における薬物乱用や中毒死の報道で目にする機会が増えている。フェンタニルは本来、がんによる強い痛みや手術後の痛みを和らげるために、医療現場で長年使用されてきた重要な医療用麻薬である。適切に用いられれば、患者の苦痛を軽減し、治療や生活の質を支える欠かせない薬剤である。</p> <p>一方で、北米を中心に、違法に製造・流通したフェンタニルが乱用され、深刻な社会問題となっている。海外では、フェンタニルがコカインや覚醒剤など他の違法薬物に混入される事例が増えており、使用者が気付かないまま摂取し、過量摂取による中毒や死亡に至るケースも多数報告されている。これは医療とは無関係な違法市場における問題である。</p> <p>こうした国際的な背景の中で、日本が密輸ルートの一部として報道される例も見られるようになり、フェンタニル問題は日本社会にとっても無関係ではない課題として受け止められ始めている。ただし、日本国内では医療用麻薬の管理体制が比較的厳格に保たれており、現時点で海外と同様の状況が広がっているわけではない。</p> <p>ここで強調すべき点は、医療で使用されるフェンタニルと、違法に流通するフェンタニルは本質的に全く異なるということである。医療用フェンタニルは成分や量が厳密に管理される一方、違法に流通するものは品質や含量が不明であり、重大な健康被害を引き起こす危険性を伴う。この違いが十分に伝わらず、「フェンタニル＝危険な薬」という印象だけが広がることは、適切な疼痛治療を妨げかねない。</p> <p>フェンタニルを正しく知ることは、過度な不安を避けつつ、医療の安全性と社会的な安心を両立させるための第一歩である。本シンポジウムを通じて、医療と社会の間にある課題を冷静に整理し、患者が安心して必要な治療を受けられる環境について考える機会としたい。</p> <div style="text-align: center;"> <h2 style="color: #0070C0;">フェンタニルの二つの側面</h2> <p>—医療での適切な使用と、違法市場における危険性—</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; background-color: #ADD8E6; padding: 5px;"> <p style="text-align: center; color: white;">医療で使用されるフェンタニル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 医師、薬剤師の管理のもとで使用 ・ 成分や量が厳密に管理されている ・ がんの痛みや手術後の痛みを和らげる ・ 患者の苦痛を軽減し、生活の質を支える  <p style="text-align: center; color: white; background-color: #ADD8E6; padding: 2px;">安全性を重視した医療用の薬</p> </td> <td style="width: 5%; text-align: center; vertical-align: middle; background-color: black; color: white; font-weight: bold;">同じ名前でも全く違うもの</td> <td style="width: 45%; background-color: #FF69B4; padding: 5px;"> <p style="text-align: center; color: white;">違法に流通するフェンタニル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 違法に製造、流通している ・ 成分や量が不明 ・ 他の違法薬物に混入されることがある ・ 使用者が気づかずに摂取する可能性がある  <p style="text-align: center; color: white; background-color: #FF69B4; padding: 2px;">中毒や死亡につながる重大な社会問題</p> </td> </tr> </table> </div>		<p style="text-align: center; color: white;">医療で使用されるフェンタニル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 医師、薬剤師の管理のもとで使用 ・ 成分や量が厳密に管理されている ・ がんの痛みや手術後の痛みを和らげる ・ 患者の苦痛を軽減し、生活の質を支える  <p style="text-align: center; color: white; background-color: #ADD8E6; padding: 2px;">安全性を重視した医療用の薬</p>	同じ名前でも全く違うもの	<p style="text-align: center; color: white;">違法に流通するフェンタニル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 違法に製造、流通している ・ 成分や量が不明 ・ 他の違法薬物に混入されることがある ・ 使用者が気づかずに摂取する可能性がある  <p style="text-align: center; color: white; background-color: #FF69B4; padding: 2px;">中毒や死亡につながる重大な社会問題</p>
<p style="text-align: center; color: white;">医療で使用されるフェンタニル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 医師、薬剤師の管理のもとで使用 ・ 成分や量が厳密に管理されている ・ がんの痛みや手術後の痛みを和らげる ・ 患者の苦痛を軽減し、生活の質を支える  <p style="text-align: center; color: white; background-color: #ADD8E6; padding: 2px;">安全性を重視した医療用の薬</p>	同じ名前でも全く違うもの	<p style="text-align: center; color: white;">違法に流通するフェンタニル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 違法に製造、流通している ・ 成分や量が不明 ・ 他の違法薬物に混入されることがある ・ 使用者が気づかずに摂取する可能性がある  <p style="text-align: center; color: white; background-color: #FF69B4; padding: 2px;">中毒や死亡につながる重大な社会問題</p>		
# フェンタニル	# 疼痛緩和	# 医療と社会		

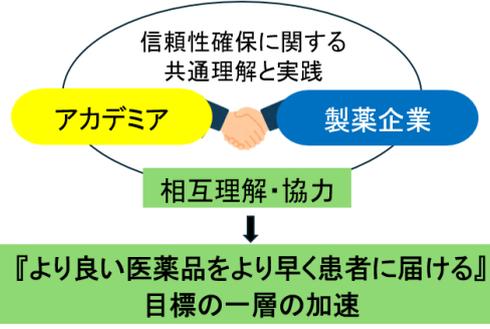
一般シンポジウム

S02	<p>植物・菌体由来ナノ粒子研究の進展と新規機能性素材としての将来展望</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 鈴木 亮 (帝京大薬)、板倉 祥子 (東京理大)</p>	
2026年3月27日 09:30 ~ 11:30		
第06会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F402)		
<p>近年、動物細胞が分泌する細胞外小胞(ナノ粒子)が、生体内において細胞間情報伝達などの重要な役割を担っていることが明らかとなりつつある。最近では、これらのナノ粒子に含まれる成分を解析して、疾病の前段階や初期段階を知るための研究や疾病治療に応用する取り組みが進められている。</p> <p>一方、動物細胞ではなく、植物や菌体もナノ粒子や膜小胞などを有していることが知られている。これらの粒子には、素材固有の多様な天然物由来成分が含有されており、その成分を利用した細胞の活性化や疾病治療への応用に関する研究が進められている。そのため、このような非動物性のナノ粒子や膜小胞は、新たな機能性素材として注目されている。しかし、その特徴や生体に対する作用は十分に解明されておらず、機能性素材としての応用は発展途上である。</p> <p>そこで本シンポジウムでは、植物や菌体などの動物細胞とは異なる起源から得られるナノ粒子や膜小胞に焦点を当て、その機能解析から医薬品開発への応用の可能性に至る最先端の研究成果の講演を通じて、新たな機能性素材としての将来展望について議論する。</p>		
#ナノ粒子	#膜小胞	#天然物

S03	<p>健康・医療診断技術の イノベーション・レギュレーション・コミュニケーション</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 築茂 由則 (国立衛研)、近藤 昌夫 (阪大薬)</p>	
2026年3月27日 09:30 ~ 11:30		
第07会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F403)		
<p>疾患の原因となる標的の同定にはじまる創薬研究において、これらの標的を検出する診断技術は、医薬品の有効性評価や患者の層別化による適正使用、さらには発症前や早期段階での介入を目指す先制医療を支える重要な健康・医療基盤であり、その役割は年々大きくなっている。</p> <p>また、昨今の次世代シーケンスや質量分析等を活用した網羅的解析技術の進展に伴い、診断技術の高精度化や様々な特性を持つ診断マーカーの開発が加速している。さらに、令和6年度厚生労働省医薬品等審査迅速化事業において、体外診断用医薬品の臨床性能試験のあり方を検討する研究班が設置され、革新的な診断技術の開発と社会実装を支える環境整備も進められている。</p> <p>これらの背景を踏まえ、本シンポジウムでは、体外診断用医薬品の審査を担う厚生労働省医薬局医療機器審査管理課、がんや認知症などの臨床開発、認知症領域における基礎・応用研究、腸内細菌叢に関する基礎・応用研究、診断技術のレギュラトリーサイエンス(規制科学)に関する研究分野で活躍する研究者等が一堂に会し、産・官・学それぞれの立場から、診断研究の最先端の見聞や課題を共有し、健康・医療を支える診断技術の現在・未来について議論したい。</p>		
#レギュラトリーサイエンス	#診断	#健康・医療

一般シンポジウム

S04	改正大麻取締法の現状と今後の課題 オーガナイザー 船田 正彦（湘南医療大薬）、花尻（木倉） 瑠理（国立衛研）		
2026年3月27日 09:30～11:30		第08会場(第2学舎1号館 A棟 [5F] A501)	
国内外の大麻乱用は拡大傾向にあり、わが国では若年層での大麻乱用問題が台頭している。一方、大麻関連の医療応用については、大麻成分を利用した医薬品として、てんかん発作を抑制するカンナビジオール内服薬などが実用化され、医療ニーズが高まっている。しかし、これまでの大麻取締法では、大麻由来の医薬品の使用は原則として禁止であったため、適切な法改正が必要であった。こうした状況から、わが国では大麻取締法が改正（2023年12月公布）されるに至った。改正法施行以降、大麻由来とされる成分を含む食品などの販売が広がっており、その機能や安全性に関して注目が集まっている。今後は、さらに大麻関連製品の販売は拡大することが予想され、こうした製品を安全安心に使用するためには、大麻の栽培から製品の安全性管理までの一貫したシステム構築が望まれる。本シンポジウムでは大麻取締法が改正に至った国内外の経緯と見直しの4ポイントおよび現在の課題について整理し、今後の大麻および大麻成分含有製品の規制のあり方について考察する。			
<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="flex: 1;"> <p>改正大麻取締法: 見直しのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 大麻由来医薬品の医療ニーズ (2) 大麻使用罪の創設 (3) THC成分規制の導入 (4) 大麻草の栽培 </div> <div style="flex: 0.2; text-align: center;">  </div> </div>			
#大麻	#THC	#CBD	

S05	非臨床試験成績の信頼性確保に向けた産学共通認識の構築 ーより良い医薬品をより早く患者へ届けるためにー オーガナイザー 竹内 恵美子（日本QA研GLP）、大室 弘美（日本QA研GLP、武蔵野大薬）		
2026年3月27日 09:30～11:30		第09会場(第2学舎1号館 B棟 [4F] B401)	
医薬品は、開発過程で得られた信頼できる情報からなる情報製品である。このため、医薬品開発過程で実施される非臨床および臨床試験の成績の信頼性確保は不可欠である。現在、画期的な新薬創生等を目指す非臨床試験での産学連携が拡大している一方で、信頼性確保に関する理解および実践においては産学間で差がみられ、産学の共通認識の構築が喫緊の課題となっている。			
日本QA研究会GLP部会第5分科会では、こうした課題認識のもと、研究公正やアカデミア試験成績の信頼性確保を主要なテーマとして活動を行ってきた。主な取り組みは、①理系新卒社員の研究公正教育の実態調査、②アカデミア向けラボノート作成、③薬効薬理試験の信頼性確保に役立つアカデミア向け手引きの作成、④産学共同研究／委受託試験に関する調査である。			
本シンポジウムでは、これらの取組みの共有により、非臨床試験成績の信頼性確保に関する産学共通の理解と実践を深め、相互理解と協力のもとでアカデミア試験成績の信頼性の向上を促進し、これを通じて、『より良い医薬品をより早く患者に届ける』目標の一層の加速に寄与したい。			
			
#医薬品開発	#産学連携	#研究公正	

一般シンポジウム

S06

薬学アントレプレナーが新時代を創り出す

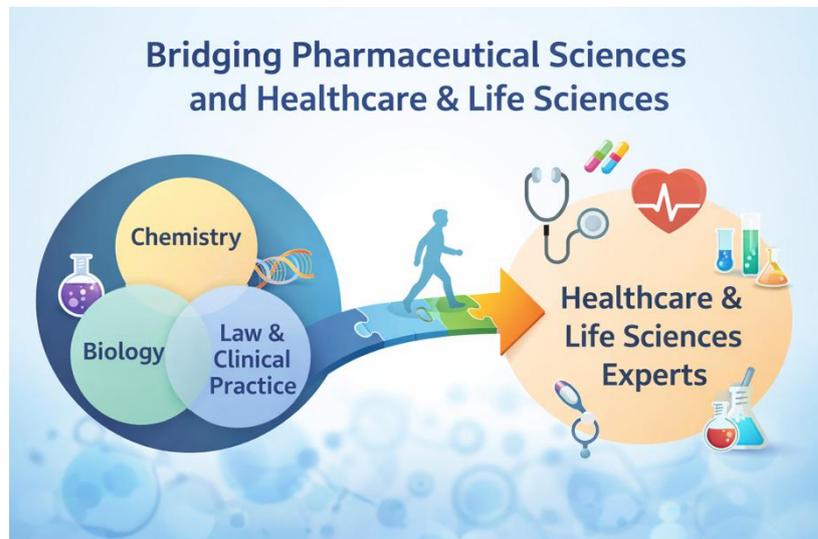
オーガナイザー 森岡弘志（熊本大院薬）、井上浄（リバネス）、弘津辰徳（サイディン）

2026年3月27日 09:30 ~ 11:30

第16会場(第3学舎1号館A棟 [1F] A101)

薬学は、物理・化学・生物といった基礎科学から、医療、創薬、規制、社会制度に至るまでを横断する、極めて総合性の高い学問分野である。薬学教育を受けた人材は、研究者や薬剤師にとどまらず、ヘルスケア・ライフサイエンス領域全体を支える専門家として、社会に大きな価値を提供できる可能性を秘めている。

一方で、急速に変化する社会課題や産業構造の中において、薬学人材の専門性をどのように社会へ接続



していくのか、その教育のあり方が今、改めて問われている。社会課題を自ら発見し、主体的に解決へと挑む力——すなわち「アントレプレナーシップ」を備えた薬学人材の育成は、これからの薬学教育における重要な要素の一つである。薬学教育にこの視点を取り入れることで、研究者、薬剤師、企業人といった従来の枠を超え、社会と能動的に関わる薬学人材の育成が可能になると考えている。

シンポジウム前半では、アントレプレナーシップ教育の意義や、各大学での具体的な教育プログラム、大学発ベンチャーを核とした人材育成モデルなどが紹介される。薬学的専門性がどのように社会課題解決へと結びつくのか、その考え方や仕組みを多角的に学ぶ機会となる。

本シンポジウムの大きな特徴の一つが、教育を受けた学生による「学生ピッチ」である。自らの視点で描く将来像や挑戦は、教育の成果を可視化すると同時に、参加者に新たな気づきや刺激を与えることが期待される。教員や企業関係者にとっても、次世代の薬学人材が何を考え、どこへ向かおうとしているのかを直接知る貴重な機会となる。

後半のパネルディスカッションでは、「薬学教育の未来を描く」をテーマに、薬学教育が社会とどのようにつながり、どのような人材を育成していくべきかについて、参加者とともに考える場としたい。

本シンポジウムは、薬学教育を「知識や技能の修得」にとどめず、社会に価値を生み出す力の育成へと進化させるための挑戦である。

薬学教育に関心を持つ教員、次世代人材の活躍を期待する企業関係者、そして自身の可能性を広げたい学生にとって、これからの薬学の在り方を考える重要な機会となるだろう。

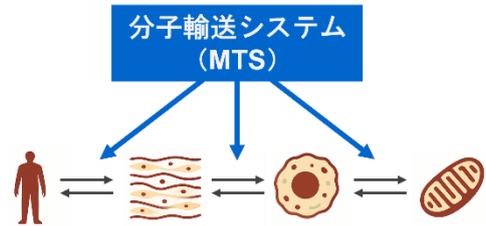
#薬学アントレプレナー

#薬学教育の未来

#学生ピッチ

一般シンポジウム

S07	生体内分子輸送システムを開拓する異分野技術の共創 オーガナイザー 持田 祐希 (東京科学大総合)、横尾 英知 (国立衛研) 林 周斗 (東京科学大総合)	
2026年3月27日 09:30 ~ 11:30		第17会場(第3学舎1号館 A棟 [2F] A201)
<p>私たちの体では、生体分子が「適切な場所に、適切な量だけ、適切なタイミングで」運ばれることで、分子同士が正しく働き、生命活動が維持されている。この分子輸送の仕組みが乱れると、体内の分子配置が崩れ、細胞や身体の機能異常、つまり病気につながる。また、薬を投与した場合も、体内での薬の動き方によって、効果や副作用が大きく左右される。もし、私たちの体の中で分子の動きを人為的にコントロールできれば、より正確な治療や健康維持、さらには生体機能の向上が可能になると期待される。ここでは、体内の分子輸送を制御する技術を「分子輸送システム (Molecular Transport System : MTS)」と定義する。MTSの発展は、生体の理解を深め、医療や薬学の新たな展開を切り拓くと考えられる。</p> <p>本シンポジウムでは、MTSの基盤技術を研究する若手研究者が、最新の成果と将来展望を紹介する。全身、組織、細胞、オルガネラといった異なる階層での分子輸送技術や、特定の細胞や分子を正確に認識する分子設計、それらを応用した新しい創薬の可能性について議論し、分野を超えた共創を促進する。</p>		
#分子輸送システム	#分子動態	#抗体・ペプチド



S08	環境・衛生部会シンポジウム ～栄養素の機能と薬学的応用：エビデンスに基づく疾病予防～ オーガナイザー 中川 公恵 (神戸学院大薬)、多胡 めぐみ (慶應大薬)	
2026年3月27日 9:30 ~ 11:30		第19会場(第3学舎1号館 A棟 [3F] A301)
<p>栄養素は、体の健康状態を一定に保つ働き（恒常性維持）や代謝の調節に欠かせない存在であり、その機能を解明することは薬学の視点からも極めて重要である。特に、食品に含まれる特定の成分が病気の予防や進行を抑える役割については、今や欠かせない研究テーマとなっている。近年、分子レベルの基礎研究や大規模な疫学調査により、栄養素が病気のリスクを下げる仕組みが科学的に明らかになりつつある。薬学は「くすり」の開発や薬による病気の治療が主軸と思われがちだが、食を通じた病気の予防や健康支援は、健康を守る「衛生薬学」が担う重要な領域である。栄養素の生理活性と疾患との関連を解明し、疾病の発症予防や健康支援、さらには治療に繋げ応用することが今、強く求められている。</p> <p>本シンポジウムでは、ビタミンをはじめとする栄養素やバイオフィクター（生体調節因子）の働きと疾病との関連について、基礎・臨床・疫学の各分野から最新の知見を紹介する。第一線で活躍されておられる演者それぞれの専門的アプローチや研究成果を共有していただき、科学的根拠（エビデンス）に基づく疾病予防のあり方から、栄養と薬学の融合がもたらす疾病予防の将来展望について、議論を深めたい。多くの方に、栄養素が担う新たな役割を知っていただく機会となることを期待する。</p>		
#栄養素	#疾病予防	#健康

一般シンポジウム

S09	<p>脂肪細胞の光と影 — 生理的機能と病態への転化</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 濱田 浩一（昭和薬大）、厚味 巖一（帝京大薬）</p>	
2026年3月27日 09:30 ~ 11:30 第20会場(第3学舎4号館D棟 [3F] D302)		
<p>脂肪細胞と聞けば、あぶらがたまった細胞とのイメージが一般的である。このイメージ通りのエネルギー源としてあぶらを蓄えた脂肪細胞は、白色脂肪細胞とよばれる。実は、白色脂肪細胞には、体の調子を整えるために必要な様々な物質を分泌するという重要な役割もある。また、褐色脂肪細胞とよばれる脂肪細胞も体内には存在しており、体温の維持や体のエネルギー調節に関与し、最近では健康寿命との関連が注目されている。このように脂肪細胞には、健全な生活を送るために必要な「光」の側面がある一方で、白色脂肪細胞のあぶらがたまりすぎた状態である肥満が糖尿病や心筋梗塞などを引き起こす原因となる「影」の側面があることもわかってきている。本シンポジウムでは、この「光」と「影」の双方に焦点を当て、基礎的な研究成果から臨床応用に向けた知見を紹介することで、脂肪細胞の本当の姿をお見せしたい。</p>		
		
#脂肪細胞	#恒常性の破綻	#肥満症

S12	<p>レギュラトリーサイエンスの萌芽研究最前線</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 多田 稔（国立衛研）、津田 雅貴（AMED）、 中村 亮介（帝京大薬）、近藤 昌夫（阪大薬）</p>	
2026年3月27日 13:10 ~ 15:10 第07会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F403)		
<p>世界の医薬品売り上げ上位には、バイオ医薬品、再生・細胞治療、遺伝子治療といった新規モダリティが台頭している。我が国でも、核酸・抗体医薬、マイクロバイオーム制御治療等の新規モダリティの創出や関連研究の深化が加速している状況である。</p> <p>「レギュレーションを制する者はイノベーションを制する*」と言われるように、これらの次世代創薬プラットフォームを健康・医療イノベーションにつなげるには、新しい技術や視点を取り入れたレギュラトリーサイエンス（RS）研究の充実が不可欠である。</p> <p>言い換えると、新たな視点と柔軟な発想を持つ次代を担う若手 RS 研究者の育成が我が国の創薬力の抜本的強化の鍵を握っていると言える。</p> <p>日本医療研究開発機構（AMED）医薬品等規制調和・評価研究事業では、2017年から若手 RS 研究の支援を開始し、これまでに42課題への支援を通じて、我が国の RS 基盤力の醸成を図ってきている。</p> <p>本シンポジウムでは、当該事業の支援をうけた新進気鋭の若手 RS 研究者を演者としてお招きし、我が国の創薬力強化に資する革新的 RS 研究の息吹を体感する機会を提供する。是非、奮ってご参集いただきたい。</p> <p>*日下部哲也, ファルマシア, 54, 798, 2018</p>		
#レギュラトリーサイエンス	#創薬イノベーション	#健康・医療イノベーション

一般シンポジウム

<p>S10</p>	<p>日本の創薬力強化に貢献する薬学教育</p> <p>オーガナイザー 有澤 光弘 (阪大院薬)、平田 收正 (和医大薬)</p>
<p>2026年3月27日 13:10 ~ 15:10</p>	<p>第04会場(第2学舎3号館 E棟 [3F] E301)</p>
<p>日本の創薬力はいま、重要な転換点にある。創薬モダリティの高度化・多様化、国際競争の激化、バイオベンチャーの台頭、臨床ニーズの複雑化など、医薬品開発を取り巻く環境は急速に変化している。このような状況下で、日本の創薬力を持続的に強化するためには、人材育成の在り方、すなわち薬学教育の再構築が不可欠である。</p> <p>本シンポジウムでは、政策、産業、ベンチャー、医療現場の第一線で活躍する専門家が集い、日本の創薬力強化に資する次世代薬学教育の方向性を多角的に検討する。</p> <p>■ 日本の創薬力の現状・課題・未来 日比 謙一郎 (文部科学省高等教育局医学教育課) 我が国の創薬研究に関する現状を把握し、薬学教育における課題を整理した上で、今後の薬学教育が創薬力向上へどう貢献していくか、その方策について紹介する。</p> <p>■ 世界的医薬品開発動向と国家戦略 木下 徳康 (厚生労働省医薬局総務課) グローバルな医薬品開発の潮流を概観し、日本の創薬力向上に向けた制度的取り組みを解説する。国家戦略としての創薬政策を理解する貴重な機会となる。</p> <p>■ 製薬企業から見た薬学教育への期待 志水 勇夫 (日本製薬工業協会/住友ファーマ) 製薬企業の研究開発現場が求める人材像を具体的に提示する。専門性のみならず、実装力や連携力を備えた人材をいかに育成するかについて、産業界の視点から提言する。</p> <p>■ バイオベンチャーが求める創薬研究者像 澤 匡明 (カルナバイオサイエンス) 創薬バイオベンチャーの現場から、スピード感、専門性、事業化視点を兼ね備えた創薬研究者像を提示する。新たな創薬エコシステムにおける人材像を考察する。</p> <p>■ 臨床ニーズ駆動型創薬研究の実践 城野 博史 (熊本大学病院薬剤部/大学院薬学教育部) 大学病院薬剤部における臨床ニーズ起点の創薬研究を紹介する。臨床現場における創薬力強化の意義・重要性について考察する。</p>	
<p>#薬学教育</p>	<p>#創薬</p>

一般シンポジウム

S11 次代創薬へのゲームチェンジャー
 —AMED BINDS における最新研究の情報と利用により創薬へと繋ぐ—
 オーガナイザー 善光 龍哉 (東大院薬)、辻川 和丈 (阪大院薬)

2026年3月27日 13:10 ~ 16:10

第05会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F401)

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) の「生命科学・創薬研究支援基盤事業 (Basis for Supporting Innovative Drug Discovery and Life Science Research : BINDS)」は、我が国の幅広い生命科学関連研究に立脚し、その中の優れた研究成果を創薬研究などの実用化研究に繋げることを目的として実施されている事業である。BINDS では、1) クライオ電子顕微鏡や放射光施設等の利用により創薬標的候補分子の構造解明を支援する構造解析ユニット、2) オミックス解析等により生命現象の解明や創薬標的分子の妥当性評価を支援する発現・機能解析ユニット、3) バイオインフォマティクスや AI 研究により創薬標的候補の機能を推定するインシリコ解析ユニット、4) 特徴ある化合物ライブラリーを整備・供与し、創薬ケミカルシーズ探索を支援するヒット化合物創出ユニット、5) 有機合成と *in vitro* ADME 評価により Hit to Lead 研究を支援するモダリティ探索ユニットと 6) *in vivo* 薬効、薬物動態や安全性の評価を支援する薬効・安全性評価ユニットの 6 つのユニットが連携して生命科学の基礎研究から創薬研究の推進を強力に支援している。さらに、BINDS 支援研究者は、最先端の研究を展開することによりさらなる高度な研究支援体制の構築に向けた高度化研究も実施している。本シンポジウムでは、BINDS の各ユニットで活躍する若手研究者や女性研究者を含め、多様な研究領域の研究者により展開されている挑戦的、革新的な先端研究を紹介する。本シンポジウムにご参加いただく研究者にとって、BINDS がいかに生命科学・創薬研究のゲームチェンジャーとなり得るのかを“聞いて、知って、そして活用していただく”機会となることを願っている。次代の薬学・創薬研究を切り拓くヒントが、このシンポジウムで得られるものと考えている。

知って 使って 繋がって 飛躍を遂げるあなたの研究

構造解析ユニット
放射光施設、XFEL、クライオ電子顕微鏡、NMR 等を活用したタンパク質や RNA の構造解析により、創薬標的分子の機能解明をお手伝いします。

発現・機能解析ユニット
空胞オミックス解析、一細胞解析、メタゲノム解析等による生命現象の解明や、創薬標的探索や創薬標的妥当性検証のお手伝いをします。

インシリコ解析ユニット
計算科学を駆使して、インシリコスクリーニング、Hit to Lead 研究、最適化研究のお手伝いをします。

連携・融合ユニット
発現・機能解析ユニット + インシリコ解析ユニット
1細胞・微小組織試料について DNA/RNA 解析、プロテオーム解析、メタゲノム解析およびバイオインフォマティクス解析のオールインワン解析を支援します。

まずは相談。⇒ binds.jp にアクセス

※1 生命科学研究センター
※2 薬学生命科学センター

ヒット化合物創出ユニット
製薬企業由来、天然物・中分子等の特徴ある化合物ライブラリーの提供、薬理評価系・HTS系構築等によるケミカルシーズ探索をお手伝いします。

モダリティ探索ユニット
医薬品の候補にならざる低分子、核酸、ペプチド等の調製・合成、*in vitro* ADME 評価を行うことによりリード化合物の探索と最適化研究をお手伝いします。

連携・融合ユニット
ヒット化合物創出ユニット + モダリティ探索ユニット
スクリーニング系構築、ライブラリーの提供、ヒット化合物特定、ヒット化合物の問題点の抽出とその解決のための調製・合成、リード化合物創出、最適化研究までをシームレスに支援します。

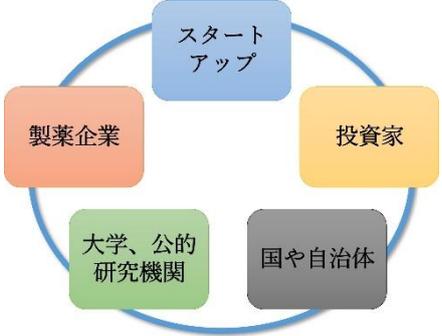
薬効・安全性評価ユニット
生体・生体組織等による薬効評価、薬効評価に用いる疾患モデル動物の提供、*in vivo* ADME 評価のお手伝いをします。

BINDS司令塔・調整機能活動サポート班
各種情報の収集・分析、ウェブサイト支援窓口運営、HP・イベント・広報等さまざまな支援活動を通じて、BINDS 事業の円滑な発展に貢献します。

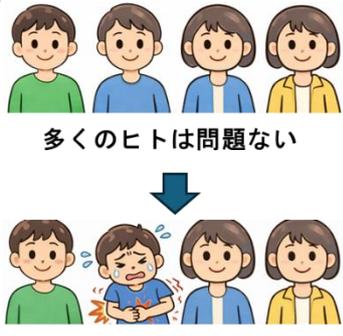
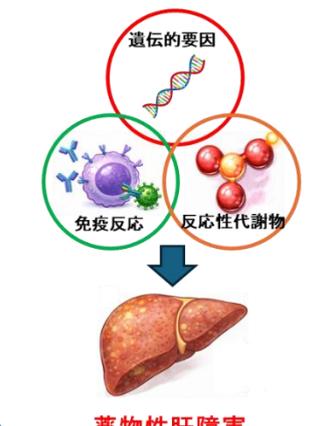
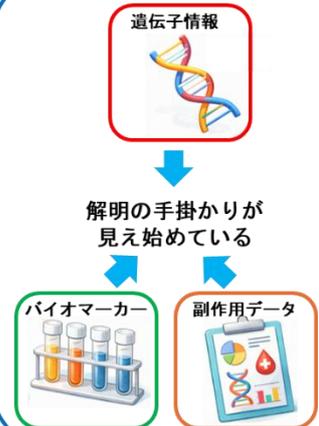
#BINDS #生命科学研究支援 #創薬研究支援

一般シンポジウム

S13	有毒植物による健康被害と薬学の役割 オーガナイザー 小林 大祐（北医療大薬）、登田 美桜（国立衛研）、高橋 正幸（北海道衛研）	
2026年3月27日 13:10 ~ 15:10	第08会場(第2学舎1号館 A棟 [5F] A501)	
<p>有毒植物による食中毒は国内で毎年報告されている。なかでも、近年報告が増えているスイセンや死亡例が散発しているイヌサフランによる食中毒は、食品衛生上の重要な課題である。本シンポジウムでは、原因究明から臨床対応、予防啓発に至るまで、食品衛生学、臨床医学、分析化学、毒性学などの多角的観点から、最新の知見と実践的なアプローチを紹介する。</p> <p>5人のシンポジストによる講演では、1)有毒植物による食中毒の発生動向、2)北海道における事例と対応、予防啓発の統合的モデル、3)医療現場での健康被害の現状と課題、4)最先端の分析手法による毒成分定量法、5)銀杏中毒研究の統合的展開を取り上げる。これらを通じて、有毒植物による食中毒の予防・対策における、薬学が果たすべき社会的役割と、基礎科学・臨床医学・食品衛生学の学際的連携の重要性を議論する。医療従事者、薬学研究者・教育者、食品衛生学研究者、行政関係者の皆様のご参加をお待ちする。</p>		
		
#有毒植物	#食中毒予防	#学際的連携

S16	日本の創薬エコシステム：国の創薬力向上に向けて オーガナイザー 奥山 亮（北陸先端科技大院先端科学技術）	
2026年3月27日 13:10 ~ 15:10	第18会場(第3学舎1号館 A棟 [2F] A202)	
<p>2020年以降、米国で承認された新薬の約7割は中小企業によって作り出されており、その多くが大学の研究成果をもとにしたスタートアップである。一方、日本では創薬スタートアップの育成が十分に進んでおらず、国際的な創薬競争力の低下が課題となっている。創薬スタートアップを育て、成長させるには、大学研究者、起業家、投資家、政府、製薬企業などが連携する「創薬エコシステム」の構築が不可欠である。近年、政府もその重要性を認識し、エコシステムを活性化するための取り組みを進めている。</p> <p>本シンポジウムは、こうした状況を踏まえ、「日本の創薬エコシステムをどう強化するか」「日本に合ったエコシステムの姿とは何か」を議論する。産学官金それぞれの立場から登壇者を迎え、先進的な取り組みや成功事例を紹介する。さらに、会場との対話を交えた議論を通じて、日本の創薬の将来像をともに考える機会としたい。</p>		
		
#創薬	#エコシステム	#スタートアップ

一般シンポジウム

<p>S14</p>	<p>特異体質性薬物性肝障害研究のフロントライン —特異体質性薬物性肝障害の予測は可能か？— オーガナイザー 加藤 隆児 (大阪医薬大薬)</p>	
<p>2026年3月27日 13:10 ~ 15:10</p>	<p>第09会場(第2学舎1号館B棟 [4F] B401)</p>	
<p>薬物性肝障害とは、薬をきっかけに肝臓に障害が起こる副作用である。発症する頻度は、1万人から10万人に1人程度と比較的まれであるが、いったん起こると命に関わることもある重い副作用である。</p> <p>薬物性肝障害には、薬の量が多いほど起こりやすい「中毒性」と、薬の量に関係なく、体質や免疫の反応によって起こる「特異体質性」がある。なかでも特異体質性の肝障害は、事前に予測することが難しく、重症化しやすいことから、大きな問題となっている。</p> <p>特異体質性薬物性肝障害の原因としては、生まれ持った体質の違い（遺伝的要因）や、体の防御反応の関与（免疫反応）、さらに近年では、薬が体内で変化して生じる反応性の高い物質（反応性代謝物）の影響などが考えられている。しかし、なぜ一部の人だけに発症するのか、その詳しい仕組みはいまだ十分に解明されていない。そのため、発症を予測・予防し、適切に治療する方法の開発が強く求められている。</p> <p>本シンポジウムでは、企業や大学で特異体質性薬物性肝障害の研究に取り組む研究者が集まり、最新の研究成果と今後の可能性について紹介する。発症の仕組みを分子レベルで明らかにする研究、発症の兆候を捉える指標（バイオマーカー）の探索、さまざまな情報をまとめて解析することでリスクを予測する試み、動物を用いた研究など、幅広い視点から理解を深める内容である。さらに、製薬企業における薬の開発や安全性評価への応用についても取り上げ、私たちが目指す未来（副作用を未然に防ぐ、安心してお薬が使える、一人ひとりに合った医療の実現）に繋がるシンポジウムにしたいと考えている。</p> <div data-bbox="188 1254 1401 1915" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center; background-color: #e0f0ff; border-radius: 5px;">同じお薬を飲んでも…</p>  <p style="text-align: center;">多くのヒトは問題ない</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">一部のヒトに肝障害が発症するのはなぜ？</p> </div> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center; background-color: #e0f0ff; border-radius: 5px;">肝障害が起こる原因</p>  <p style="text-align: center; color: red;">薬物性肝障害</p> </div> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center; background-color: #e0f0ff; border-radius: 5px;">最先端の研究内容</p>  <p style="text-align: center;">解明の手掛かりが見え始めている</p> </div> </div> <div style="border: 2px solid red; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center; margin-top: 10px;"> <p style="font-weight: bold; font-size: 1.2em;">目指す未来</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 副作用を未然に防ぐ ・ 安心してお薬が使える ・ 一人一人に合った医療の実現 </div> </div>		
<p>#薬物性肝障害</p>	<p>#特異体質性</p>	<p>#反応性代謝物</p>

一般シンポジウム

S15	DNA コード化ライブラリー (DEL) 構築を深化させる 新規弾頭部構築反応開発と DEL 実生産 オーガナイザー 金井 求 (東大院薬)、宮地 弘幸 (東大院薬創薬機構)
-----	---

2026年3月27日 13:10 ~ 15:05

第17会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A201)

今日我が国製薬業界およびアカデミアでは創薬標的の枯渇懸念に直面している。数少ない有望な創薬標的に作用する化合物を迅速・高確率に取得する技術が切望されている。膨大な探索空間から医薬品の種を効率的に選抜出来るスクリーニング技術として、DNAコード化ライブラリー(DEL)の利活用が注目されている。しかし我が国における本技術開発は欧米中の後塵を拝している。この現状を打破するため、東京大学大学院薬学系研究科附属創薬機構 構造展開ユニットでは、産学共用のDELプラットフォームの垂直立ち上げ事業を産学官にて連携し 2022年より開始した。その成果は既に共同研究先である複数製薬企業の創薬現場で活用され始めている。

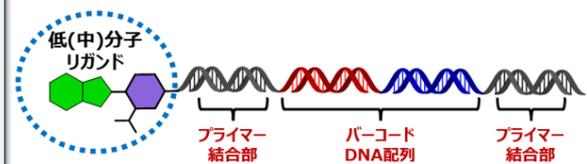
一方DELプラットフォームの最重要な柱であるDEL合成に関しては、近年基礎研究の観点から国内研究者より独自の発想を起点とした成果の発信がなされ始めている。まさに我が国はDEL創薬の創成期にあると言えよう。

本シンポジウムでは、我が国のDEL合成に関する先駆的研究および実践的研究を推進されている気鋭のアカデミア研究者に、そのコンセプトや背景の哲学等を講演頂く。本シンポジウムが、我が国のDEL創薬研究の歴史の1ページとなることを期待する。

数十から1億種類のDNA-リガンド複合体合成を実現する独自コンセプトから実生産

有望な創薬標的に作用する化合物(医薬品の種)を膨大な化合物空間から効率的に選抜出来るスクリーニング技術として、DNAコード化ライブラリー(DEL)が注目されている。DEL合成では、創薬標的に結合する可能性が期待される低(中)分子リガンドの構造発案と効率的構築法の開拓が肝となる。本シンポジウムでは、我が国DEL合成に関する先駆的研究および実践的研究を推進されているアカデミア研究者に、そのコンセプトや背景等を講演頂く。

DEL: 低(中)分子リガンドとバーコードDNAの複合体



シンポジウム概要

独自反応開発
数十種類

独自反応開発
小規模ライブラリー合成

大規模ライブラリー実生産
1億種類

- 低分子warhead-DEL構築に関する基礎研究
大澤 昂志 (阪大院薬)
- 天然環状分子模倣DELの構築に関する研究
浅井 禎吾 (東北大院薬)

- Synthesis of DNA encoded library with biologically active scaffold derived from amino acid
Katarzyna Joanna Malawska (東大院薬)

- 産学協創の実践的DEL合成: その現場から
鈴木 雅士 (東大院薬創薬機構)

#DNAコード化ライブラリー (DEL)

#創薬スクリーニング技術

#産学連携

一般シンポジウム

S17

マイクロ・ナノプラスチック研究の最新知見

オーガナイザー 堤 康央 (阪大院薬)、芳賀 優弥 (阪大院薬)

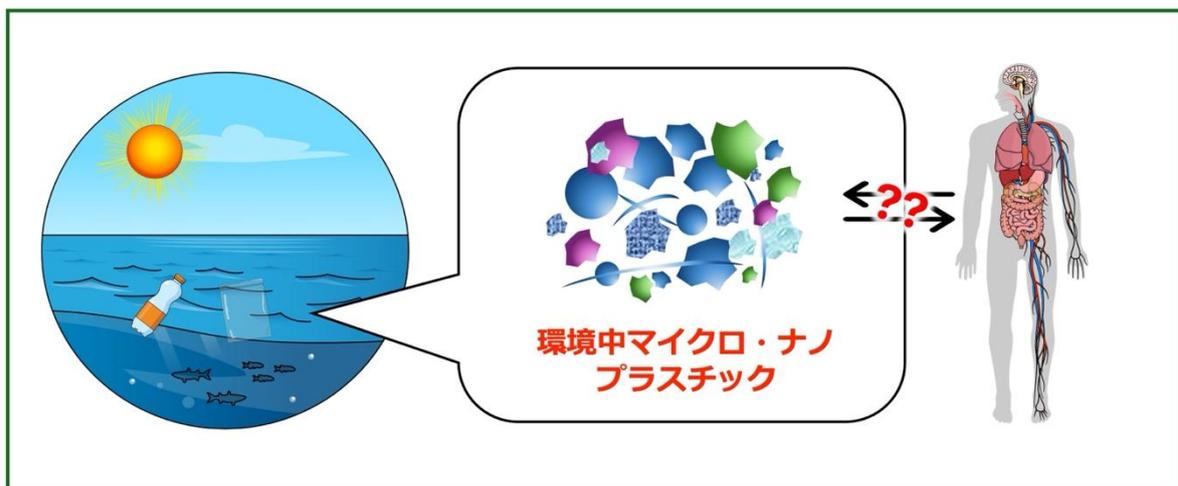
2026年3月27日 13:10 ~ 15:10

第19会場(第3学舎1号館A棟 [3F] A301)

SDGs (Sustainable Development Goals; 持続可能な開発目標) とは、地球の環境を守り、世界中の人々が将来にわたって、健康で安心して暮らしていくことを目指して、国連が定めた共通の17の目標である。これらの目標の中でも示されているように、近年、プラスチックごみが環境や人の健康に与える影響が大きな問題となっている。プラスチックごみは、海や川などの環境中で、波の力や太陽光の影響を受けることで、次第に細かい破片になっていくことが知られている。中でも、直径5 mm以下のマイクロプラスチックや、さらに小さい1 μm以下のナノプラスチックと呼ばれる非常に細かなプラスチック粒子は、海や川、空気中だけでなく、魚や鳥などの生き物、さらには人の肺や血液、胎盤、脳などの体内からも見つかっており、生態/生体系への負の影響が世界的に懸念されている。

中でも、微小なプラスチックが人の体にどのように侵入して、どのような影響を与えるのかについて、強い関心が寄せられている。また近年の研究では、環境中のマイクロ・ナノプラスチックが、病気や体のはたらきの変化と関係している可能性が高いことも報告されている。しかし、どのような性質をもつプラスチックが、実際に健康に悪い影響を及ぼすのかについては、まだ十分に明らかになっていない。つまり、環境中のマイクロ・ナノプラスチックが体内に入ったあと、体のどこに広がり、どのような影響を及ぼすのかについての知見は限られており、理解は十分とは言えないのが現状である。さらに、環境中に存在するマイクロ・ナノプラスチックは、材料の種類や大きさ、表面の状態などが非常に多様であり、このことが健康への影響を正しく評価することを難しくしている。

本シンポジウムでは、こうした課題をふまえ、最新の研究成果を分かりやすく共有し、今後どのような研究が必要なのか、またどのような課題が残されているのかについて議論したい。

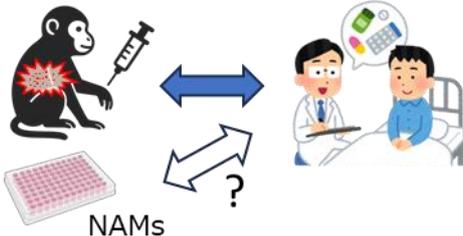


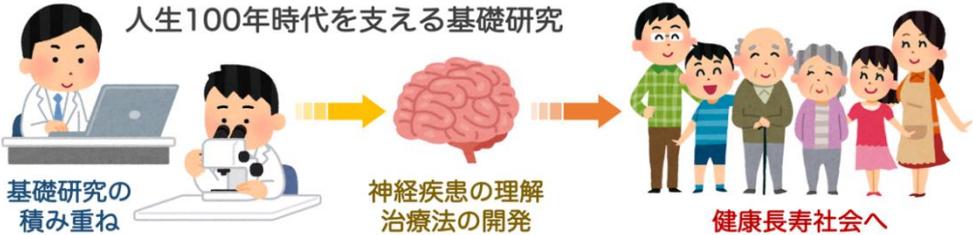
#マイクロプラスチック

#ナノプラスチック

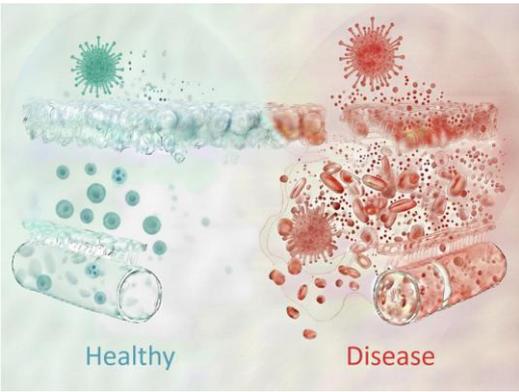
#持続可能な開発目標 (SDGs)

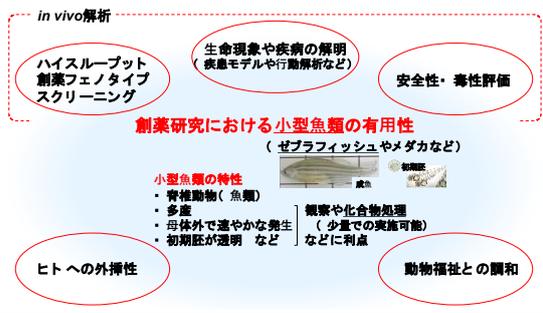
一般シンポジウム

S18	抗体医薬品の非臨床薬物動態・安全性評価に関する最新動向と今後の展望 ～新しい時代の幕開けに オーガナイザー 石井明子（国立衛研）、鈴木睦（製薬協／協和キリン）	
2026年3月27日 13:10～15:10		第20会場(第3学舎4号館D棟 [3F] D302)
<p>抗体医薬品の非臨床安全性評価は、これまで薬理的活性を示す動物種として主に非ヒト霊長類を用いて行われていたが、2025年4月米国FDAより、New Approach Methodologies (NAMs)の利用等により動物を用いた試験を例外化していく方針を示したロードマップが公開され、関係者に大きなインパクトを与えた。NAMsとは、「従来の動物モデルを用いない医薬品等の有効性、安全性及び薬物動態を評価するためのツールであり、<i>in silico</i>, <i>in chemico</i>, <i>in vitro</i>, <i>ex vivo</i> アプローチを含むあらゆる技術、方法を指す」とされている。</p> <p>本シンポジウムでは、抗体医薬品の非臨床評価に関する現状と課題の他、薬物動態や安全性の評価に関する技術開発とその応用例等について、アカデミア及び企業の立場から最新の知見をご発表いただくことで、日本の現在地を確認し、FDAロードマップを機に幕を開けようとしている新しい時代に、私達はどのように対処すべきか、議論する。</p>		
		
#抗体医薬品	#薬物動態	#安全性評価

S19	長寿社会を支える基礎研究の最前線 – 神経疾患への挑戦 オーガナイザー 福地 守（高崎健康福祉大薬）、白根 道子（名市大院薬）	
2026年3月27日 15:30～17:30		第04会場(第2学舎3号館E棟 [3F] E301)
<p>人生100年時代を迎え、健康寿命の延伸や、年齢とともに増える病気への対策は、社会全体にとって重要な課題である。本シンポジウムでは、神経疾患に焦点を当て、その成り立ちの理解や治療法の開発につながる基礎研究に取り組む研究者が集い、それぞれの研究を紹介する。基礎研究の成果が、加齢に伴う病気の理解や診断・治療の考え方にどのようにつながるのかを共有し、将来の医療を支える研究の意義と可能性について考える場としたい。本シンポジウムが、長寿社会における健康課題の解決に向けた新たな視点を示す契機となることを期待する。</p>		
		
#人生100年時代を支える基礎研究	#加齢依存的疾患	#神経疾患

一般シンポジウム

S20	生体バリア研究のフロンティア：疾患の理解と制御に向けた新展開 オーガナイザー 武村 直紀（阪大院薬）、岡田 欣晃（阪大院薬）	
2026年3月27日 15:30 ~ 17:30		第06会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F402)
<p>生体には、免疫細胞、上皮細胞、血管内皮細胞などが協調して構成する多層的なバリア機構が存在し、外部からの有害因子の侵入を防ぐとともに、内部で生じたストレスの拡散を抑制し、生理的恒常性を維持している。これらのバリアは単なる物理的障壁にとどまらず、細胞間接触や液性因子を介して多様な情報伝達を行う、多面的かつ高度な生体機構である。一方で、こうしたバリア機能の破綻や異常化は、多様な病態の発症・進展に深く関与する。そのため、バリア機能の維持や障害に関わるメカニズムを理解することは、疾患の病態解明とその理解を基盤とした効果的な治療戦略の構築につながると期待される。</p> <p>本シンポジウムでは、生体バリアを軸に、疾患の成り立ちと制御に迫る多分野の研究者による最新の研究成果を共有し、分野横断的な議論を通じて、生体バリアの統合的理解に基づく新たな疾患制御・創薬戦略の構築を目指す。</p>		
		
#生体バリア	#病態解明	#創薬展開

S22	小型魚類を用いた創薬への展開に向けた基礎研究 オーガナイザー 久米 利明（富山大学術）、土屋 創健（熊本大院生命科学）	
2026年3月27日 15:30 ~ 17:30		第08会場(第2学舎1号館 A棟 [5F] A501)
<p>ゼブラフィッシュやメダカなどの小型魚類は多産、初期胚が透明、母体外で発生が速やかに進行するなどといった特性を持ち、脊椎動物モデルとして観察や化合物処理などにおいて利便性、優位性を有する。くわえて、ヒトへの外挿性や動物福祉への調和性などから、近年、アカデミアのみならず、産業界（企業）においても創薬研究に小型魚類を活用する機運がますます高まりを見せているが、薬学分野における認識や浸透が十分とは言い難い。そこで、本シンポジウムでは、創薬研究における小型魚類の有用性や実際の活用事例を共有することを目的として、アカデミアと企業における最先端の取り組みを紹介する。具体的には、<i>in vivo</i>創薬フェノタイプスクリーニングや、ゲノム編集やトランスジェニック、病態モデルを用いた生命現象や疾病の解明、安全性・毒性評価などにおける最新の研究成果を発表し、小型魚類を用いた創薬パラダイムの現状と課題、今後の展開について議論したい。</p>		
		
#小型魚類	#創薬	# <i>in vivo</i> 解析

一般シンポジウム

S21	<p>レギュラトリーサイエンス部会若手シンポジウム： レギュラトリーサイエンスの意義と可能性—若手研究者の視点から— オーガナイザー 山下 拓真 (国立衛研)、青木 明 (名城大薬)</p>
2026年3月27日 15:30 ~ 17:30	第07会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F403)
<p>レギュラトリーサイエンスは、「科学技術の進歩を真に人と社会に役立つ最も望ましい姿に調整するための、予測・評価・判断の科学」などと定義される。国の指針である「健康・医療戦略」や「科学技術・イノベーション基本計画」にもその推進が明記されているなど、レギュラトリーサイエンス研究の重要性は社会的に認知されているところである。一方で、レギュラトリーサイエンス研究は幅広い分野の研究を包含しているために、具体的にどのような研究が行われているのか一般には把握しづらく、また「規制を強化するための研究」という負の印象を持たれる場合もあり、その魅力や学術的な面白さは、その重要性ほど広く認知されているとはいいがたい。</p> <p>本シンポジウムでは、様々な分野のレギュラトリーサイエンス研究に携わる若手研究者を演者として、それぞれの研究の意義や魅力を分かりやすくご紹介いただく。普段レギュラトリーサイエンスになじみがない研究者・学生の皆様からも広くご参加いただき、本分野への理解と関心を深める機会としたい。</p> <div data-bbox="255 963 1337 1803" style="text-align: center;"> <p>レギュラトリーサイエンス 科学技術の進歩を真に人と社会に役立つ最も望ましい姿に調整するための、予測・評価・判断の科学</p> <p>医薬品 食品</p> <p>再生医療等製品 医療機器 化粧品</p> <p>その他</p> </div> <p>重要性が認知されてきた一方、広範な領域を含み、具体的な内容や面白さは分かりづらい ▶ 若手研究者の研究の具体例から、レギュラトリーサイエンスの面白さを探る</p>	
#レギュラトリーサイエンス	#若手研究者

一般シンポジウム

<p>S23</p>	<p>ケモインフォマティクス春の学校 2026 ～化学と AI の融合による創薬化学の革新～ オーガナイザー 海東 和麻 (産総研触媒化学)、水野 忠快 (東大院薬/統数研)</p>	
<p>2026年3月27日 15:30 ～ 17:30 第16会場(第3学舎1号館A棟 [1F] A101)</p>		
<p>機械学習を中心とする人工知能 (Artificial Intelligence: AI) の技術発達は目覚ましく、現代社会に破壊的変革をもたらしている。特に ChatGPT をはじめとする生成 AI は日常的に利用されており、インフラとしての地位を確立しつつある。一方、創薬化学においても AI の活用を試みる機運は高いにも関わらず、研究における活用事例は未だに限定的である。この背景として、化学と情報学との間では基盤となる知識や技能、価値観の隔たりが大きいことが挙げられる。隔たりを「橋渡し」するには、創薬化学者・有機合成化学者もケモインフォマティクスにおける基本的な概念の理解と、創薬化学へ応用するための方法論の把握が求められる。</p> <p>本シンポジウムでは、実験化学とケモインフォマティクスの融合を試みる若手研究者を招請し、最新の研究事例と展望について御講演頂く。特に、有機合成、ケミカルバイオロジー、計算化学、自動/自律合成などをキーワードとし、広い意味でケモインフォマティクスの実践的活用にフォーカスを当てる。ケモインフォマクスを融合した独創的研究成果と研究哲学を共有することで、「AI はなんとなくすごい」という感想から一歩踏み込んだ、「AI をどのように用いるか」という議論へ踏み込み、創薬化学で AI を実践的に活用する機運が醸成されることを期待する。</p> <div data-bbox="204 1120 1369 1500" style="text-align: center;"> </div> <p>本シンポジウムの位置付け：価値観の橋渡し</p>		
<p>#ケモインフォマティクス</p>	<p>#創薬化学</p>	<p>#人工知能 (AI)</p>

一般シンポジウム

S24	<p>有機合成化学の若い力 「ミyakumiyakuと継がれる知のその先へ 有機合成 EXPO」</p> <p>オーガナイザー 佐古 真 (阪大院薬)、加茂 翔伍 (星薬大)、今野 翔 (東京薬大薬)</p>	
<p>2026年3月27日 15:30 ~ 17:30 第17会場(第3学舎1号館 A棟 [2F] A201)</p>		
<p>有機合成化学は、分子を自在につくり変える技術を基盤とし、医薬品開発や生命科学、材料科学など、幅広い分野の発展を支えてきた学問である。本シンポジウム「有機合成化学の若い力」では、次世代を担う若手研究者5名が登壇し、有機合成を起点として、分子の構造や機能を精密に設計し、社会に役立つ分子へと展開する最前線の研究を紹介する。講演内容は、天然物の合成、医薬品の実用的な合成法、新しい機能分子の創出、高分子合成や反応開発など多岐にわたり、有機合成化学が切り拓く分野横断的な研究の広がりについて議論する。若手研究者ならではの柔軟な発想と挑戦的な視点を共有することで、分野の枠を越えた相互理解を深め、次世代の化学研究が持つ可能性と広がり展望する場とする。</p> <div data-bbox="667 672 1420 1003" style="text-align: center;"> <p>有機合成化学</p> <p>材料をつくる化学、新しい化学反応、生命を支える分子、くすりをつくる化学、自然界の分子を合成</p> <p>分子をつくり、理解し、社会へつなぐ化学</p> </div>		
#有機合成	#分子創製	#若手研究者

S26	<p>環境・衛生部会若手研究者シンポジウム ～神経発達症の分子基盤を探る：神経発生異常と発達神経毒性の交点～</p> <p>オーガナイザー 大黒 亜美 (広島大院医系科学)、松丸 大輔 (岐阜薬大)</p>	
<p>2026年3月27日 15:30 ~ 17:30 第19会場(第3学舎1号館 A棟 [3F] A301)</p>		
<p>神経発達症は、子どもの成長の過程で脳の発達に特徴的な変化が生じる状態の総称であり、近年その理解の重要性が高まっている。その発症のしくみには、脳や神経が形づくられる過程が円滑に進まないことが関係していると考えられているが、不明な点も多く残されている。その背景として、遺伝的な要因に加え、発生・発達中の子どもを取り巻く環境中のさまざまな要因が複合的に影響する点が挙げられる。また、脳の働きは神経細胞だけでなく、それを支える細胞や、情報を効率よく伝えるための構造が正しく作られることも重要である。こうした仕組みに変化が生じることが、行動や考え方、感情の表れ方に影響する可能性がある。</p> <p>本シンポジウムでは、こうした背景を踏まえ、脳を構成するさまざまな細胞の働きや、その乱れが脳内の情報の伝わり方にどのように影響するかを紹介する。また、神経発達症の特徴を示す動物を用いた解析や、発達期の脳の変化を捉える方法についても取り上げる。これらの研究成果を通じて神経発達症の理解を深め、将来的な予防や支援のあり方につなげることを目指す。</p>		
#神経発達症	#脳発達	#遺伝要因と環境要因

一般シンポジウム

S25

薬学における生命指向型化学 ～分子技術で拓くタンパク質科学の未来～

オーガナイザー 石川 文洋 (近畿大)、佐藤 伸一 (東北大学際科学フロンティア研)

2026年3月27日 15:30 ～ 17:30

第18会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A202)

生命現象の根幹を担うタンパク質は、静的な三次元構造だけでなく、時空間的に変化する構造ダイナミクスによって高度な機能を発揮する。しかし、従来の構造生物学的手法では結晶構造のような「スナップショット」しか得られず、生体内での動的な分子挙動を捉えることは困難であった。また、強力な遺伝子工学的ツールも、内在性タンパク質への直接介入や、ヒトを含む高等動物への応用には限界がある。こうした背景から、化学的アプローチによる革新的なタンパク質研究手法の開発が強く求められている。

本シンポジウムでは、「分子技術で拓くタンパク質科学の未来」を副題に、化学を基盤とした最先端のタンパク質研究を紹介する。イメージング、共有結合性創薬、一分子解析、プロテオミクス、細胞内送達など、多角的なアプローチにより、タンパク質を「観る」「識る」「操る」新たな方法論を提示する。これらの分子技術は優れた時空間選択性を持ち、従来アクセスできなかった生命現象への介入を可能にすることで、基礎研究から創薬応用まで幅広いインパクトをもたらしている。

具体的には、リガンド指向性化学により生きたマウス脳内での内在性受容体を遺伝子操作なしに標識する技術、プロテオーム中に豊富なリジン残基を標的とした新規反応基による共有結合性創薬、高速原子間力顕微鏡を用いた受容体のナノ秒スケールでの一分子動態観察などの革新的成果が報告される。さらに、タンパク質凝集を部位特異的に検出する蛍光プローブによる抗体医薬品の品質評価技術、抗体やナノボディの効率的な細胞内デリバリーシステムなど、実用化を見据えた研究成果も紹介される。これらの分子技術が相互に連携することで生まれる統合的なタンパク質制御の可能性と、次世代創薬への応用について展望する。



#タンパク質科学

#ケミカルバイオロジー

#共有結合

一般シンポジウム

S27	核酸医薬の品質評価の考え方 オーガナイザー 井上 貴雄（国立衛研）、小比賀 聡（阪大薬）、川上 純司（甲南大学）	
2026年3月27日 15:30 ~ 17:30		第20会場(第3学舎4号館D棟 [3F] D302)
<p>疾患の原因となる遺伝子の発現を特異的に制御するという従来にない作用機序をもつ核酸医薬は、これまで治療が困難であった難治性疾患の治療法として大きな注目を集めている。実際に、1998年に世界で最初の核酸医薬が登場して以来、現在までに20品目を超える核酸医薬が世界で承認されている。</p> <p>一方、核酸医薬は、分子量が比較的大きく、ポリアニオン性の化学構造をもち、高度に官能基化されているという構造上の特徴や、主に固相合成によって合成されるという製造上の特徴から、従来の医薬品とは異なる品質管理の考え方が必要となる。我々はAMED次世代治療・診断実現のための創薬基盤技術開発事業「核酸医薬品の製造・精製・分析基盤技術の開発」プロジェクトにおいて、産学官の強固な連携のもと、核酸医薬の製造・精製・分析から規制における課題解決のために研究開発を行ってきた。</p> <p>本シンポジウムでは、この研究開発での取り組みを概説するとともに、核酸医薬の品質管理・品質評価の考え方や本研究開発で培ってきた最先端の分析技術、製造技術に関して報告する。さらに、核酸医薬の品質に関する規制の動向についても紹介したい。</p>		
#核酸医薬	#製造分析技術	#品質評価

S29	体内動態解析が拓く内因性生理活性物質の”時空間的”機能解析研究の最前線 オーガナイザー 島田 紘明（近畿大薬）、野口 幸希（慶應大薬）	
2026年3月28日 09:30 ~ 11:30		第05会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F401)
<p>生物は多様な環境変化に晒されながらも、自身の体を環境に順応させることで生命活動を維持する。この生体恒常性において重要な役割を担うのが、体内で作られる様々な伝達物質（内因性生理活性物質）である。</p> <p>人類は約100年前のアドレナリンの発見を皮切りに、インスリンなどのペプチドホルモン、プロスタグランジンなどの脂質メディエーターに加え、遺伝子のはたらきを調節するRNAなど、多様な形態の内因性生理活性物質とその生理作用を明らかにしてきた。一方で、これらの物質を「必要な場所に」、「必要な時」、「必要な量だけ」存在させる仕組み、すなわち、「時空間的な調節メカニズム」は未だ多くがブラックボックスである。</p> <p>本シンポジウムでは、この未踏領域に独自の視座から挑む気鋭の若手研究者が集結し、生命現象への理解を深めることを目指す。トランスポーターや代謝酵素、細胞外小胞などが制御する内因性生理活性物質の体内動態に光を当て、生体恒常性を支える「舞台裏」の真髄に迫る。</p>		
#生体恒常性	#内因性生理活性物質	#体内動態

一般シンポジウム

S28

ファインバブルの物理化学と医療の融合によるイノベーション創出の最前線

オーガナイザー 武田 真莉子 (神戸学院大薬)、寺坂 宏一 (慶應大理工)

2026年3月28日 09:30 ~ 11:30

第04会場(第2学舎3号館E棟 [3F] E301)

ファインバブルは、国際標準化機構 (ISO) により正式に定義された日本発祥の先進技術であり、21世紀を代表する科学的イノベーションの一つとして世界的な注目を集めている。近年、洗浄、水処理、農業、化学工学など、多様な分野で応用が急速に拡大するなか、特に直径 $1\mu\text{m}$ 未満のウルトラファインバブル (UFB) は、負に帯電した表面特性やコロイド粒子に類似した独自の物性を有し、生理活性気体をはじめとする多様な気体を水中で安定保持できる点が大きな特徴である。これらの物理化学的特性により、医療・生命科学分野において新たな機能性素材としての価値が見いだされている。UFBの利用により、従来は困難であった生理活性気体の経口摂取が可能となるほか、UFB自体の物理化学的特性による薬物吸収促進効果や、生体機能への影響など、多彩な生物学的作用が報告されており、医療・創薬分野における革新的応用展開が期待されている。

本シンポジウムでは、UFB研究を牽引する第一線の研究者を招聘し、最先端の研究を共有する。まずはじめに、慶應義塾大学理工学部の寺坂宏一先生にUFB特有の物理化学的特性について解説いただく。次いで、福岡大学医学部の貴田浩志先生、帝京大学薬学部の鈴木亮先生に、UFBと超音波との併用によるアンメットメディカルニーズの高い疾患治療への応用可能性についてご講演いただく。さらに、ポーラ化成工業の秦野衛先生には、UFBをDDSキャリアとして利用した経皮デリバリーに関する研究成果を紹介いただき、神戸学院大学薬学部の諏訪部晋先生にはバイオ医薬品あるいは水素などの生理活性気体の経口デリバリーに関する最新の知見を示していただく。本シンポジウムを通じて、多角的な視点から議論を深めるとともに、工学・医学・薬学の枠を超えた連携を促進し、次世代医療を支えるUFBの新たな可能性を展望する。



#ファインバブル

#薬物送達システム

#医療応用

一般シンポジウム

<p>S30</p>	<p>腫瘍循環器学のレギュラトリーサイエンス～基礎から臨床までの取り組み～ オーガナイザー 加藤 百合 (九大院薬)、諫田 泰成 (国立衛研薬理)</p>	
<p>2026年3月28日 09:30～11:30 第08会場(第2学舎1号館A棟 [5F] A501)</p>		
<p>近年のがん治療の進歩により、多くの患者が長期にわたり生存できるようになってきた。一方で、抗がん剤が心臓や血管などに悪影響を及ぼす可能性があることも明らかになってきている。これらの心毒性は、不整脈、心不全、虚血性心疾患、高血圧、血栓症など多岐にわたり、発現時期や重症度などさまざまである。このような背景から、がんと心血管系の両側面から患者により良い医療を提供する「腫瘍循環器学」が大変注目されている。</p> <p>本セッションでは、腫瘍循環器学を軸に、基礎研究から臨床、規制科学（レギュラトリーサイエンス）に至るまでを一貫して取り上げ、イノベーションを医療現場に橋渡しする取り組みに焦点を当てる。臨床の観点では、がん治療中および治療後に生じうる多様な心血管系有害事象の予防・管理や、がん専門医と循環器専門医の連携によるチーム医療の実践などについて紹介する。基礎研究の観点では、ヒト iPS 細胞から作製した心筋細胞を活用し、抗がん剤が心臓に及ぼす影響をメカニズムに基づいて評価する最新の研究を紹介する。さらに、免疫チェックポイント阻害剤による心毒性を例に、基礎研究と臨床情報を統合したビッグデータ解析に基づく新たなリスク評価法についても紹介する。</p> <p>このような背景のもと、本セッションは基礎研究におけるイノベーションを臨床へ橋渡しするとともに、医薬品の安全性評価や承認審査に資する科学的根拠として位置づけることを目指したレギュラトリーサイエンス研究として企画したものである。がん治療の有効性と心臓の安全性をいかに両立させるのかという課題に対し、今後取り組むべき方向性について議論する。また、国内外で新薬の承認審査への活用が期待されている最新の科学技術（New Approach Methodologies; NAMs）の位置づけについても考察する予定である。</p> <p>本セッションを通じて、産官学連携のもと、国民の皆様には安全で有効な医薬品をできるだけ早く届けるための医療イノベーション推進の一助となる議論ができれば幸いである</p> <div style="text-align: center;">  <p>最先端の科学技術 イノベーションの橋渡し 抗がん剤の心毒性</p> </div>		
<p>#抗がん剤</p>	<p>#心毒性</p>	<p>#ビッグデータ</p>

一般シンポジウム

S31	<p>抗ウイルス感染症研究のフロンティア ―創薬を指向した多種多様なアプローチ―</p> <p>オーガナイザー 辻 耕平（東京科大総合研究院生体材料工学研）、玉村 啓和（東京科大総合研究院生体材料工学研）、三隅 将吾（熊本大）、藤田 美歌子（熊本大学薬学部）</p>	
2026年3月28日 09:30 ~ 11:30 第09会場(第2学舎1号館 B棟 [4F] B401)		
<p>「抗ウイルス感染症研究のフロンティア」は毎回異なるトピックスを取り上げている。12回目となる今回は、“創薬を指向した多種多様なアプローチ”をテーマとした。COVID-19のパンデミックを契機に、ウイルス感染症に対する基礎研究の重要性が見直されている。グローバル化する現代社会では、ウイルスも海を越えての移動が可能となるため、我々は常に新興再興感染症の危険にさらされている。そこで今回は、様々な研究背景を有する先生方の独創性溢れる創薬研究への最新のアプローチの一端をご紹介いただく。本シンポジウムは、計算科学から霊長類を用いた感染症モデルの構築に至るまで、薬学のみならず医学、ウイルス学を専門とする先生方をお招きし、非常に広範な研究領域をカバーしている。本シンポジウムが、分野横断型シンポジウムとして、異分野融合研究を推進し、明日の抗ウイルス感染症研究を担う学生諸氏の抗ウイルス研究に触れるきっかけとなることを期待する。</p>		
#ウイルス感染症	#創薬研究	#異分野融合

S32	<p>薬学教育第三者評価による薬学6年制教育プログラムの検証と質保証</p> <p>オーガナイザー 荒田 洋一郎（帝京大薬）、長谷川 洋一（名城大薬）</p>	
2026年3月28日 09:30 ~ 11:30 第16会場(第3学舎1号館 A棟 [1F] A101)		
<p>薬学教育第三者評価（以下、第三者評価）は、2012年度（平成24年度）からスタートした。6年制の薬学部及び薬科大学（以下、6年制薬学部）は7年毎に薬学教育評価機構による外部評価を受けることになる。全ての6年制薬学部は第1期の第三者評価を終え、現在は、第2期の第三者評価が進行中である。そして、2027年度（令和9年度）からは第3期の第三者評価になる。</p> <p>薬学教育評価機構では、2023年度（令和5年度）から第3期に向けた評価基準の改定作業を開始した。第3期では、教学マネジメント指針や2022年（令和4年）に改訂された薬学教育モデル・コア・カリキュラムの趣旨も踏まえ、薬学教育6年制課程における学位プログラムの質保証を目指す。そのため、大学自ら薬学教育プログラムを自己点検・評価し、その結果に基づいて改善を図る内部質保証の実効性に重点をおいていく。本シンポジウムでは、薬学教育第三者評価の目的と今後の在り方、今求められる教育の質保証の意義、これまでの第三者評価の振り返り、第3期評価基準の概要などについて紹介する。</p>		
#薬学教育第三者評価	#内部質保証	#第3期評価基準

一般シンポジウム

S33	<p>若手が育む薬剤学研究の新たな芽：次なる技術・概念の構築を目指して</p> <p style="text-align: center;">オーガナイザー 山田 幸平（静岡県大薬）、高田 春風（徳島大院医歯薬）</p>	
2026年3月28日 09:30～11:30		第17会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A201)
<p>医薬品は様々なモダリティに多種多様な薬剤学的アプローチを適用して創出される知の集合体である。今後、より効果的な、より安全な医薬品を継続的に生み出していくためには、開発対象と既存の薬剤学アプローチを単に組み合わせるだけでなく、斬新なアイデアを具現化して積極的に医薬品開発へ活用していく姿勢が重要であろう。薬剤学という大樹の幹からは既に多くの研究領域が枝分かれしており、そこから、あるいは新たな枝として次々と新しい領域が芽吹いている。本シンポジウムでは消化管内環境を再現した <i>in vitro</i> システムの構築、超分子的アプローチによる機能性製剤の設計、新たな drug delivery system (DDS) の提唱という内容で、薬剤学に新たな技術、概念あるいは指針を芽吹かせようと日々研究にひた走る新進気鋭の若手研究者にご講演いただく。最新の研究成果に基づく演者とオーディエンスの多角的な議論が、薬剤学の新たな芽を育み、次なる芽吹きへと繋がっていくことを期待したい。</p>		
		
#消化管内環境を再現した <i>in vitro</i> システム	#超分子的アプローチ	#Drug delivery system

S34	<p>学術変革領域研究 (B)「特化メタボロン」： タンパク質の自己集合研究が拓く新たな薬学</p> <p style="text-align: center;">オーガナイザー 佐々木 栄太（慶應大薬）、森 貴裕（東大院薬）</p>	
2026年3月28日 09:30～11:30		第18会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A202)
<p>細胞内においてタンパク質は、単独で機能するだけでなく、状況に応じて自己集合し、反応効率や生成物特異性を精密に制御している。植物や微生物が生産する特化代謝産物は、医薬品開発において重要な天然分子資源であり、その生合成を担う酵素群が集合して機能的な複合体を形成する「特化メタボロン」の存在が近年注目を集めている。しかし、その構造や細胞内での制御機構については、未解明な点が多く残されている。本シンポジウムでは、学術変革領域研究 (B)「特化メタボロン」に参画する若手研究者を中心に、酵素複合体形成に関する最新の研究成果を紹介する。有機化学、分子生物学、構造生物学、進化工学、分子イメージングといった多様な研究手法を通じて、タンパク質間相互作用をどのように捉え、制御し、応用へとつなげるかを議論する。計画班4名のシンポジストに加え、関連分野の第一線で活躍する招待講演者1名を迎え、計5名による講演を通して、将来の薬学研究および物質生産研究につながる新たな研究の方向性を提示することを目指す。</p>		
 <p style="text-align: right;">特化メタボロン</p>  <p style="text-align: right;">領域 HP</p>		
#天然物生合成	#タンパク質複合体	#自己集合

一般シンポジウム

S35	衛生薬学とレギュラトリーサイエンスをつなぐ、 シン生殖発生毒性研究への挑戦 オーガナイザー 東阪 和馬 (阪大)、横田 理 (国立衛研毒性部)	
2026年3月28日 09:30 ~ 11:30		第19会場(第3学舎1号館A棟 [3F] A301)
妊婦・胎児は化学物質に対する感受性が高く、妊娠期における化学物質への曝露は、胎児の発育・発達や母体の流産・早産などのリスクを高める。そのため、妊婦・胎児に対する化学物質の安全性評価の重要性が世界的に認識されており、特に、化学物質の生殖発生毒性試験は、ヒトでのリスク評価につながる情報となる哺乳類の生殖発生に対する影響を明らかにすることを目的としている。現在、動物 3Rs (Reduction; 実験動物の削減、Refinement; 実験動物の苦痛の軽減、Replacement; 実験動物の置き換え) の需要が高まる中、従来法である動物を用いた毒性試験法に加え、ヒト生体試料等を用いた生殖発生に関する毒性発現機構の解明とそれに基づく新規代替法の開発が注目されている。本シンポジウムでは、医薬品における生殖発生毒性評価の現状と課題を見据え、衛生薬学・レギュラトリーサイエンスの視点から最新トピックをご紹介頂き、今後の展望について論じる機会としたい。		
#生殖発生毒性	#医薬品	#動物 3Rs

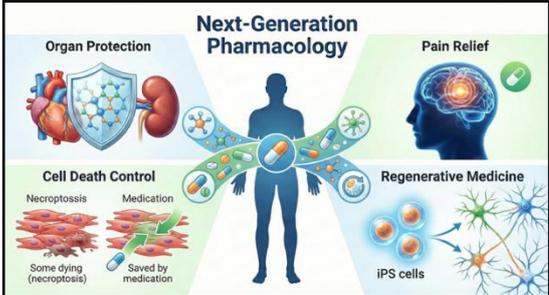
S36	多様な生体内脂質の生理機能と疾患治療への展開 オーガナイザー 清水 かほり (阪大院薬)、河野 望 (東大院薬)	
2026年3月28日 13:10 ~ 15:10		第05会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F401)
脂質 (あぶら) は、エネルギー源になるだけでなく、生体膜の成分や体内での情報伝達、体表面のバリアになるなど、様々な機能を有している。生体膜の主要成分であるリン脂質は、極性頭部 (コリン、エタノールアミンなど) や脂肪酸 (オレイン酸やドコサヘキサエン酸など) により構成される。さらに極性頭部の違いや脂肪酸の違い (炭素鎖の長さ、二重結合の数、オメガ3・オメガ6などの二重結合の位置) により、リン脂質には1000種類以上の分子種が存在する。そのため、それぞれのリン脂質分子種が固有の機能をもつことが考えられている。一方、リン脂質を構成する脂肪酸の変化は、脂質代謝異常をはじめ、がんや不妊など様々な疾患に関与することが注目されている。		
本シンポジウムでは、リン脂質の代謝に関わる酵素や脂質メディエーター (生理機能をもつ脂質) に関する最新の研究成果を発表していただき、多様な生体内脂質の生理機能や疾患治療への展開について議論したい。		
#リン脂質	#脂質メディエーター	#脂肪酸

一般シンポジウム

S37	<p>生体模倣システム</p> <p>オーガナイザー 石田 誠一（崇城大）、山崎 大樹（国立衛研）</p>	
2026年3月28日 13:10 ~ 15:10	第07会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F403)	
<p>2025年に入って創薬の非臨床試験に関して、FDAを始めとした欧米の規制当局が相次いで動物実験からの脱却を宣言し、ヒト型 <i>in vitro</i> 試験法の積極的な利活用に舵を切った。ヒト型 <i>in vitro</i> 試験法の中でも注目されている技術の1つが生体模倣システム（MPS: microphysiological systems）である。MPSを用いた細胞培養では、臓器連結やシェアストレスの負荷等、生体外でヒト臓器機能を高精度に模倣することが可能であり、現在それを用いて創薬やその他の分野に応用しようとする動きが世界中で活発化している。すでに有効性の評価ではMPSで得られた非臨床データのみでの臨床試験開始申請（IND申請）がFDAに受理された例も出てきている。本邦では、AMED「再生医療・遺伝子治療の産業化に向けた基盤技術開発事業」にてデバイスおよび搭載細胞の開発（第一期：2017～2021年）が行われ、現在はMPSを用いた評価系開発と社会実装（第二期：2022～2026年）が進められている。また、AMED規制調和等・評価研究事業（2025～2027年）ではMPSのOECDテストガイドラインへの導入について評価法の開発と並行して国内施設間検証試験が開始され、創薬における適格性認定について関連するステークホルダー間での議論が開始されるなど、MPSの行政的な利活用についても進められている。このような状況の中、本シンポジウムでは様々な分野でMPSが利活用されてきている現状や各分野での議論を整理し、社会実装および行政的な利活用に必要な次の一手を議論したい。</p>		
<p style="text-align: center;">MPSの現状から利活用の可能性を考える</p> <p>The diagram illustrates the ecosystem of MPS. At the top, three main entities are connected by double-headed arrows: MPSサプライヤー (MPS Suppliers), 規制当局 (Regulatory Agencies), and 産業界（ユーザー） (Industry/Users). Below this, three key areas are highlighted in circles: 再現性・信頼性 (Reproducibility/Reliability) with 'データの信頼性' (Data Reliability), 健全性モニタリング (Integrity Monitoring) with '代謝指標・培養管理' (Metabolic Indicators/Culture Management), and 評価基準・ガイドライン (Evaluation Standards/Guidelines) with '明確な基準の整備' (Establishment of Clear Standards). A blue bar at the bottom of this section reads '信頼性の高いMPSデータ' (Highly Reliable MPS Data). Below this bar, four logos are shown: OECD テストガイドライン (OECD Test Guidelines), FDA U.S. FOOD & DRUG ADMINISTRATION I STAND Program, 質の保証 (Quality Assurance) with a microscope icon, and 行政利用の適格性 (Suitability for Administrative Use) with a checklist icon.</p>		
#生体模倣システム	#社会実装	#OECD テストガイドライン

一般シンポジウム

S38	<p>保健機能食品がセルフメディケーションの真の担い手になり得るためには</p> <p style="text-align: center;">オーガナイザー 北市 清幸（岐阜薬大）、小林 義典（北里大薬）</p>		
2026年3月28日 13:10 ~ 14:55		第08会場(第2学舎1号館 A棟 [5F] A501)	
<p>保健機能食品は、国のルールに沿って「食品の機能性」を表示できる食品であり、健康を維持するためのセルフメディケーションを支える存在として期待されている。しかし、消費者の認知度は低いのが実状であり、紅麹事件のような健康被害の報告もあるため、消費者が自らの健康のために保健機能食品を安心して選ぶことには依然として難しさがある。</p> <p>保健機能食品がセルフメディケーションの真の担い手となるためには、制度の見直しに加え、正しい知識と摂取法を伝え、体質や薬との飲み合わせも含めて相談に乗れる人材が欠かせない。また、国がその人材として位置づけるアドバイザーースタッフや薬剤師の教育・研修を、より充実させるべきである。さらに、事業者は特に天然由来素材で起こりやすい品質のばらつきを適切に管理し、製品としての信頼を確保する必要がある。</p> <p>本シンポジウムでは、保健機能食品に関する最新動向、品質の考え方、人材育成の現状と課題を共有し、保健機能食品がセルフメディケーションの真の担い手になり得る条件とその具体策を論議したいと考えている。</p>			
			
#保健機能食品	#セルフメディケーション	#薬剤師・アドバイザーースタッフ	

S39	<p>次世代の薬理学を切り拓く：基礎から臨床応用までの挑戦</p> <p style="text-align: center;">オーガナイザー 合田 光寛（広島大院医系科学）、西村 周泰（同志社大院脳科学）</p>		
2026年3月28日 13:10 ~ 15:10		第09会場(第2学舎1号館 B棟 [4F] B401)	
<p>近年の薬理学研究は、病気の仕組みを細胞・分子レベルで解明する基礎研究から、その知見を新しい治療薬や再生医療へとつなげる応用研究まで、急速な広がりを見せている。特に、高齢化社会で問題となる心臓病や脳神経疾患などの難治性疾患に対し、従来の枠を超えた新しい治療戦略が求められている。</p> <p>本シンポジウムでは、次世代を担う若手研究者が集結し、心血管系や中枢神経系における「基礎から臨床への橋渡し」をテーマに最新の研究成果を発表する。ここでは、臓器間ネットワーク、細胞恒常性、再生誘導、細胞死制御といった多様な切り口から、疾患機構の解明と治療戦略の確立を目指す創薬科学の最前線を紹介する。具体的には、以下の4つの視点からアプローチする。</p> <p>第一に、sigma-1受容体を標的とした心・腎保護の新たな仕組み。第二に、心不全進行に関わる詳細な「細胞死」メカニズムの解明。第三に、ドラッグ・リポジショニングによるパーキンソン病疼痛への治療戦略。第四に、iPS細胞などを用いた再生医療の機能を高める薬学的アプローチである。</p> <p>多様な視点で病気の本質に迫り、明日の医療を切り拓く薬理学の進化と情熱を感じていただきたい。</p>			
			
#創薬科学	#再生医療	#ドラッグ・リポジショニング	

一般シンポジウム

S41	<p>物理系薬学部会シンポジウム：物理系薬学が拓く創薬科学の未来</p> <p>オーガナイザー 上田 卓見（阪大院薬）、清水 敏之（東大院薬）、福澤 薫（阪大院薬）</p>
<p>2026年3月28日 13:10～15:10 第17会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A201)</p>	
<p>物理系薬学は、薬学の基盤となる学問領域であり、薬を“物理・化学の目で理解する”ことを目的の一つとする。そこには分析化学、放射化学、構造生物学、ドラッグデリバリー、情報科学など広い科学分野さらにはそれらの融合分野が含まれる。本年度のシンポジウムでは「物理系薬学部会奨励賞」を受賞した新進気鋭の若手研究者2名に加え、放射化学分野、AIを取り入れた分子設計、蛍光プローブの創製など物理系薬学分野における最先端の研究を行っている研究者にも講演をお願いしている。講演ならびに討論を通して物理系薬学がさらに発展することを大きな目標とする。</p>	<p style="text-align: center;">物理系薬学部会奨励賞</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="background-color: #ff99cc; padding: 5px;">分析化学</div> <div style="background-color: #ccccff; padding: 5px;">DDS</div> </div> <div style="background-color: #0070c0; color: white; padding: 10px; text-align: center;"> <h2 style="margin: 0;">物理系薬学部会</h2> <p style="margin: 5px 0 0 0;">薬を物理・化学の目で理解する</p> <h3 style="margin: 0;">シンポジウム</h3> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: #ffff00; padding: 5px;">蛍光プローブ</div> <div style="background-color: #99ff99; padding: 5px;">放射化学</div> <div style="background-color: #ff99ff; padding: 5px;">AI分子設計</div> </div> 
#物理系薬学	#物理化学

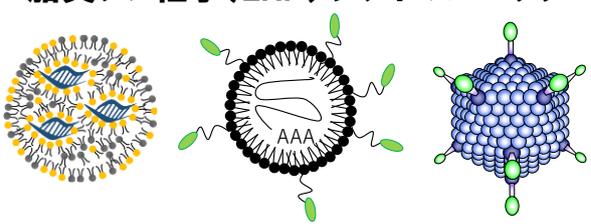
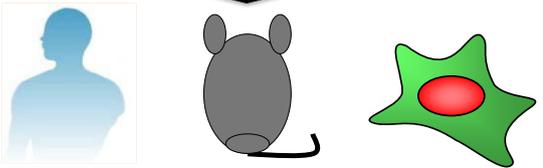
S43	<p>妊婦・胎児への安心・安全な薬物治療を目指して</p> <p>オーガナイザー 奥羽 華乃子（阪大院薬）、丹羽 祐貴（阪大院薬）</p>	
<p>2026年3月28日 13:10～15:10 第20会場(第3学舎4号館D棟 [3F] D302)</p>		
<p>妊婦の薬の服用は、胎児への影響がはかり知れないために一般的には実施されないが、母体の生命維持に必要な場合に実施されることがある。妊娠時に服薬した場合、胎盤を通じて胎児への薬物の曝露が起こる。これにより薬剤の種類によっては胎児へ大きな影響を及ぼすことがある。つまり、薬剤の胎盤透過性予測が、妊婦・胎児への安心・安全な薬物治療を目指す上で重要となる。しかし現時点では、薬物の胎盤透過性に関する情報は限られており、適切な胎盤透過性予測の方法は無い。</p> <p>本シンポジウムでは、胎盤モデルの研究、胎児の薬剤曝露量の予測評価、実際の医療現場における妊婦への投薬判断といった、研究から実際の医療現場まで、幅広い立場の5名の演者から講演をいただく。本シンポジウムを通じて、妊婦・胎児への安心・安全な薬物治療を目指して、その実現に向けた最先端の研究成果や今後の研究課題について、聴衆の皆さまと考える機会を提供する。</p>		
#妊婦	#胎盤	#薬物治療

一般シンポジウム

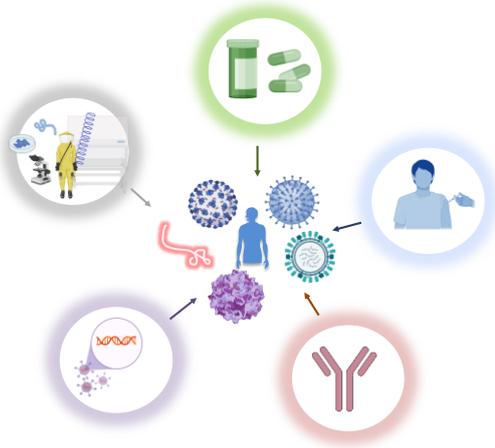
S42	環境・衛生部会衛生試験法委員会シンポジウム 食品用器具・容器包装をめぐる最近の状況とこれから オーガナイザー 古武 弥一郎 (広島大院医系科学)、六鹿 元雄 (名古屋市衛研)	
2026年3月28日 13:10 ~ 15:00		第19会場(第3学舎1号館A棟 [3F] A301)
<p>近年の持続可能な開発目標 (SDGs) への取り組みに、天然資源の持続可能な管理と効率的な利用、脱炭素化の推進、海洋プラスチックごみの削減を目的として、天然物やリサイクル材を原材料とした製品の需要が増加している。このような状況において、器具・容器包装の材質や原材料に対する関心が高まるとともに、器具・容器包装のリスク管理については大きな転換期を迎えている。</p> <p>器具・容器包装においては、ポジティブリスト制度が令和7年6月に5年間の経過措置を経て完全施行となった。さらに、従来からの規格基準等についても、総溶出物規格の導入、告示試験法から通知試験法への移行、用途別規格における清涼飲料水及び乳・乳製品の容器の材質に関する規格・制限等の撤廃、リサイクル材料に関する指針の改正などの整理が行われた。</p> <p>牛乳容器については“用途別規格”において、使用できる合成樹脂及び添加剤が制限されており、ごく一部の限られた原材料しか使用できず、その中で容器の改良、開発等を行ってきた。しかし、今般の規格基準改正によりこれらの制限が撤廃され、使用できる合成樹脂及び添加剤の範囲が拡大し、容器の改良や開発がしやすくなった。日本乳容器機器協会では、新たな規格基準に合わせて「乳等の容器包装に関する自主基準」を改定し、社会の変化に対応した“牛乳製品”をマーケット展開できるよう取り組んでいる。</p> <p>器具・容器包装から食品へ移行する物質の種類や量を測定するために溶出試験を実施する必要がある。しかし、対象物質の分析や移行量の測定が技術的に難しいケースがあり、溶出試験の実施が困難な場合が存在する。理論モデルに基づいた移行量シミュレーションは、幅広い化学物質に対して適用可能であるほか、冷凍食品やレトルト食品などの賞味期限が長い食品を想定した際の移行量、積層 (ラミネート) 品における食品非接触層に使用されている化学物質の食品への移行量も容易に推定できる。</p> <p>器具・容器包装のポジティブリスト制度は、合成樹脂を対象としたものであるが、近年、合成樹脂等の化学合成物を紙や木材などの天然物に切り替える動きが加速している。一方で、紙・板紙は植物由来のパルプを主な原料としているが、そのほかに製造助剤、添加剤等として様々な化学物質が添加されている。また、再生紙では古紙に由来する化学物質の混入が懸念される。そのような背景から、日本製紙連合会は食品向けの紙・板紙の製造に使用される化学物質をポジティブリストで管理する方針で自主基準の拡充を進めている。</p> <p>本シンポジウムでは、器具・容器包装における「食の安全」を確保するための方策を考える場として、ポジティブリスト制度及び近年の規格基準等の改正内容について解説するとともに、日本乳容器機器協会における「乳等の容器包装に関する自主基準」の改定と社会の変化に対応した取り組み、器具・容器包装から食品への化学物質の移行量に関するシミュレーションソフトによる予測値の活用事例、日本製紙連合会における「食品に接触することを意図した紙・板紙の自主基準」のポジティブリスト管理への改正を含む拡充について紹介する。</p>		
#器具・容器包装	#規格基準	#自主基準

一般シンポジウム

S44	カルコゲン超分子の生命機能と創薬戦略	
オーガナイザー 魏 范研 (東北大院薬)、西田 基宏 (九大院薬)		
2026年3月28日 15:30 ~ 17:30		第04会場(第2学舎3号館 E棟 [3F] E301)
<p>生命は、電子授受能の優れた原子や金属、とりわけ第16族元素(総称:カルコゲン)に属する生体必須元素(酸素(O)、硫黄(S)、セレン(Se))を利用してエネルギーを獲得し、進化・発展してきた。これまで、各カルコゲン原子のレドックス(酸化還元)特性のみが着目されてきたが、O、S、Seが生体必須金属とともに直鎖状または環状に連結した複合分子(カルコゲナイド)を生体内で想像以上に多く形成し、個々の元素だけでは説明できないアクティブな機能を発揮することが最近明らかになってきた。本シンポジウムでは、生物系・医療系・有機系・物理系のレドックス研究者が集い、生体カルコゲナイドの生成・代謝機構とそのユニークな役割について、最先端の研究成果を紹介していただき、その知見を基にした新しい創薬戦略について議論する。</p>		
#レドックス創薬	#カルコゲン	#ストレス応答・適応

S45	遺伝子治療・ワクチン開発に向けた基盤技術開発の最前線	
オーガナイザー 水口 裕之 (阪大院薬)、小暮 健太朗 (徳島大)		
2026年3月28日 15:30 ~ 17:30		第05会場(第2学舎4号館 F棟 [4F] F401)
<p>現在、遺伝子治療が、一部の疾病に対して革新的な医療として臨床の場で広く利用され始めている。また、新型コロナウイルスによるパンデミック下において、脂質ナノ粒子(LNP)を用いたmRNAワクチンが実用化され、核酸を用いたワクチンや様々な疾病治療法の開発が進んでいる。これら隆盛の背景にあるのは、新規ベクター技術などの基盤技術開発が飛躍的に進歩したことである。本シンポジウムでは、ウイルス・非ウイルスベクターを含めた遺伝子治療やワクチン開発に向けた基盤技術開発の最前線について議論したい。</p>		
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>脂質ナノ粒子(LNP)やウイルスベクター</p>  </div> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;"> <p>遺伝子治療やワクチンへの適用</p>  </div> </div>		
#遺伝子治療	#ワクチン	#ベクター

一般シンポジウム

S46	薬学が拓く次世代抗ウイルス戦略 -いつか来る危機、いま起こっている危機- オーガナイザー 腰塚 哲朗 (岐阜薬科大)、南保 明日香 (長崎大)	
2026年3月28日 15:30 ~ 17:30		第06会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F402)
<p>新興・再興感染症によるパンデミック（世界的大流行）は、以前からその発生が警告されていたものの、多くの人々にとっては現実味の薄いものであった。この問題は、新型コロナウイルスのパンデミックを経て、薬学が解決すべき課題として重要度を増しており、十分な準備が求められている。一方で、日常的に流行しているウイルス感染症であっても、いまだ医薬品やワクチンの開発が行き届いていないものが存在する。これらは目立って話題にされることはないが、重篤かつ予後不良な疾患を引き起こす場合があり、薬学が対応すべき重要な課題の一つである。本シンポジウムでは、このような「いつか来る危機」と「いま起こっている危機」を見直し、薬学が取り組むべき課題に対する新しいアプローチを模索したい。</p>		
		
#ウイルス感染症	#ワクチン	#医薬品開発

S47	産官学：医薬品安全性研究におけるレギュラトリーサイエンスを再考する オーガナイザー 荒川 大 (名市大)、横田 理 (国立衛研毒性病部)	
2026年3月28日 15:30 ~ 17:30		第07会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F403)
<p>動物実験の3R (Replacement, Reduction, Refinement) 推進を背景に、従来の実験動物に依存しない毒性評価法として New Approach Methodologies (NAMs) が精力的に探索・検討されている。NAMsへの期待は高まっている一方、ヒトにおける安全性を適切に予測するためには、それぞれの NAMs がどのような範囲で利用可能か (適用範囲) の明確化が不可欠となる。また、単一の手法に依存するのではなく、複数の NAMs を組み合わせた統合的アプローチ (IATA) の構築が求められている。さらに、製薬企業などのエンドユーザーが求める Concept of Use (CoU) に沿った NAMs の開発を行う必要性が指摘され、レギュラトリーサイエンスにおいても、これらの技術をどのように規制へ取り込むかについて国際的議論が進みつつある。本シンポジウムでは、まず NAMs の最新動向と残された課題を概説し、そのうえでアカデミアからは AI・機械学習を活用した薬物・化学物質の安全性評価や、新規 <i>in vitro</i> モデルによる薬物胆汁排泄評価など、先端的な試みを紹介する。さらに製薬企業からは、ヒト肝キメラ動物や iPS 細胞を活用した薬物動態予測、胚・胎児発生毒性評価への応用などの事例を取り上げ、医薬品安全性研究における NAMs の可能性と今後の課題について議論を深めていく。</p>		
#NAMs	#安全性評価	#医薬品開発

一般シンポジウム

S49	脂肪細胞研究のパラダイムシフト 一次なる Decade に向けてー オーガナイザー 榛葉 繁紀 (日本大薬)、藤森 功 (大阪医薬大)	
2026年3月28日 15:30 ~ 17:20		第09会場(第2学舎1号館 B棟 [4F] B401)
<p>1996年、今回の開催地である大阪においてアディポネクチンが発見されたことを契機に、脂肪細胞研究は大きく転換した。脂肪細胞は「余剰エネルギーの貯蔵庫」という従来の概念を超え、代謝調節や炎症制御を担う中核的プレイヤーとして、この30年で劇的に再定義された。さらに近年、革新的な肥満症治療薬が登場し、肥満関連疾患の治療と創薬研究は新たなフェーズへ突入している。したがって今後は、従来とは異なる視点から脂肪細胞の機能を深く読み解き、その制御機構を標的とした創薬が一層加速すると期待される。そこで本企画では、次の10年を切り拓く若手研究者を招き、この1~2年で特に注目を集めた最新トピック——「時間生物学」、「癌微小環境」、「カロリー制限」、「血管ネットワークとのクロストーク」、そして新たな切り口としての「音」——を軸に、脂肪細胞研究の最前線をご紹介いただく。肥満および関連疾患治療の未来像について、参加者とともに議論を深める場としたい。</p>		
#脂肪細胞	#肥満	

S50	中分子創薬研究のフロンティア ー中分子創薬に資する機能性材料の開発ー オーガナイザー 伊藤 勇太 (徳島文理大薬)、矢崎 亮 (九大高等研究院)	
2026年3月28日 15:30 ~ 17:20		第17会場(第3学舎1号館 A棟 [2F] A201)
<p>中分子医薬に分類されるペプチド医薬や核酸医薬は、従来の低分子医薬では狙うことが難しかった生命現象の要となる標的に作用できることから、次世代の医薬品として注目されている。これらの医薬品は、特定の分子だけに働きかける高い選択性を持ち、多様な機能を発揮できる点が大きな特長だ。そのため、これまで治療が難しかった疾患に対しても、新たな治療の可能性を切り拓くことが期待されている。</p> <p>このような中分子医薬の性能を最大限に引き出すためには、分子の形や性質を精密に設計・制御する技術や、新しい材料の開発が不可欠だ。これらの技術の進展は、今後の医薬品開発に大きな変革をもたらすと考えられている。</p> <p>本シンポジウム「中分子創薬研究のフロンティア ー中分子創薬に資する機能性材料の開発ー」では、分子を「どのように設計し、つくり、機能させるか」という観点から、中分子創薬を支える最新の研究成果を紹介する。基礎研究から実用化を見据えた取り組みまで幅広い話題を通じて、中分子創薬の現状と将来の可能性を分かりやすく俯瞰する場となることを目指す。</p>		
#中分子	#ペプチド	#核酸

一般シンポジウム

S52	医療機器の安全性評価における薬学の挑戦と貢献 オーガナイザー 戸塚 ゆ加里（星薬大薬）、山本 栄一（国立衛研）	
2026年3月28日 15:30 ~ 17:28		第20会場(第3学舎4号館 D棟 [3F] D302)
<p>近年、動物実験の削減を目指す「3Rの原則」に基づく代替法の開発と適用が、医療機器の生物学的安全性評価においても極めて重要な課題となっている。本シンポジウムでは、医療機器に含有される化学物質の安全性評価の中でも、特に遺伝毒性評価をエンドポイントとした評価法に焦点を当て、薬学的視点からの新しいアプローチについて議論する。まず、オーガナイザーの山本（国立衛研）より本シンポジウムの概要について説明した後、宮島 敦子先生（国立衛研）から医療機器の生物学的安全性評価における遺伝毒性試験国際規格の改訂に関してご説明いただく。福田 隆之先生（ボゾリサーチセンター）はCROの立場から、TK6細胞やBhas 42細胞を用いた遺伝毒性試験の実例を示し、<i>in vitro</i>系を用いた医療機器評価の実装状況と課題を明示する。さらに、福原 潔先生（昭和大院薬）と戸塚（星薬大薬）から、従来の遺伝毒性評価では想定されていなかった新たな作用機序を指標とする評価法や、ヒトへの外挿性が高いと期待される3次元培養システムを用いた手法など、最新の研究成果について紹介する。本シンポジウムを通じて、信頼性が高くかつ実用性に優れた安全性評価の確立に向けて必要な科学的知見と今後の展望について議論したい。</p>		
#医療機器	#安全性評価	#実験動物代替法

S53	病院薬剤師が実践するリバーストランスレーショナルリサーチの最前線 — 分子レベルから臨床・データサイエンスまで — オーガナイザー 増田 智先（姫路獨協大薬）、伊東 弘樹（大分大病院薬）、池田 龍二（宮崎大病院）、城野 博史（熊本大学病院薬剤部）	
2026年3月29日 09:30 ~ 11:30		第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)
<p>科学技術の進歩に伴い、多様な臨床情報の取得が可能となり、治療標的分子の同定およびその機能を制御する創薬モダリティの多様化が実臨床においても急速に進みつつある。一方、実臨床における新たな薬物治療の実践には、臨床試験で集積されたエビデンスだけでは解決できない症例も多く、臨床経験を有する薬剤師自らが試行錯誤を繰り返しながら、エビデンスを創出・蓄積することが薬物治療の最適化には必要不可欠である。</p> <p>本シンポジウムでは、臨床と基礎の双方にチャンネルを有し、最先端の技術基盤に基づいたエビデンス創出を目指す薬剤師（Pharmacist-scientist）の創薬・育薬研究について、「分子レベルから臨床・データサイエンスまで」と題し、臨床薬剤師ならではの着眼点、いち早く臨床に還元しうる環境を活かした研究活動の意義と重要性についてご紹介いただき、病院薬剤師が取り組む研究の現状、問題点、今後の展開について考えたい。</p>		
#病院薬剤師	#リバーストランスレーショナルリサーチ	#Pharmacist-scientist

一般シンポジウム

S54	地域医療薬学の推進と薬学 オーガナイザー 根岸 健一（北里大薬）、玉城 武範（ミドリ薬局）、吉山 友二（北里	
2026年3月29日 09:30～11:30		第05会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F401)
<p>新たな薬学教育が創生され、医療系人材のセンスと質を具えた薬剤師が期待される。今、従来の垣根を超えたさらなる異分野連携を進め、地域が求める医療をめざして、新たな風を起こすことが求められる。そのために科学的根拠に基づいた医療を実践し、必要な医療を切れ目なく提供できる体制を整備する必要がある。地域医療に関係する医療人として、その職能を発揮するために必要な知識・技術の基本となる一つに総合科学の薬学がある。薬学は、患者の臨床ケアを向上させるために、個別化医療と医薬品の合理的な使用を実現することに貢献しており、</p> <p>地域医療の実践と薬学による協働が不可欠である。地域医療が必要としている斬新な対応策を始動させなければならないと考え、より地域医療の第一線を意識して本シンポジウムをオーガナイズしたところに特徴を見出すことができる。本シンポジウムでは地域医療薬学の推進と薬学の現状を確認し、今後の方向性について議論を深めたい。</p>		
		
#地域医療薬学	#医療人	#人材育成

S56	2040年に向けて地域医療を共に支えていくための ヘルスケアエコシステムを考える オーガナイザー 串田 一樹（昭和薬大）、佐藤 嗣道（東京理大薬）	
2026年3月29日 09:30～11:30		第07会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F403)
<p>少子高齢社会の到来によって人口減少が進んでおり、2040年に向けて医療、福祉だけでなく、行政、産業界、テクノロジー分野等が一つになって持続した社会づくりを目指すようになった。特に、個人の健康にかかわるサービス等が新しいテクノロジーと共に提供され、それが質の高い保険医療システムを支える時代を迎えた。人口減少が進む中、医療・介護資源の偏在等により、保険医療の持続性が懸念され、適正な医療提供を継続する上でヘルスケアエコシステムの考え方が生まれてきた。</p> <p>ヘルスケアエコシステムは、医療提供者、患者だけでなく、医療に関係するテクノロジー分野の産業界の他に、関係する省庁とも連携して、資源や機能を共有し、有効に機能するように調整・連携・協力のもとに持続した医療の質向上と効率化を目指すものとされている。</p> <p>医療連携から多職種連携へ、さらに社会連携と発展するうえで、情報の共有が必要であり、そこにはデータエコシステムの構築も必要である。このように、多様な社会のニーズに応えるために薬学教育においても医学、歯学、薬学共通でモデル・コア・カリキュラムが作成された。このような社会が急速に現実になりつつあるので、薬剤師もこの社会変化を理解して行動する必要がある。</p>		
#人口減少	#ヘルスケアエコシステム	#タスク・シェア/シフト

一般シンポジウム

S55	基礎薬学を活用した Clinical Decision-Making による 処方個別最適化を目指そう！ オーガナイザー 座間味 義人（岡山大病院薬）、西川 元也（東京理大）、
-----	--

2026年3月29日 09:30 ~ 11:30

第06会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F402)

海外では、医師の処方を個別最適化する取り組みとして、約40年前より薬剤師によるアカデミック・ディテリング（Academic Detailing：AD）が実践されてきた。米国、豪州、カナダ、英国などでは、薬剤師が薬物治療に主体的に関与し、その有効性・安全性に責任を持つ専門職としての立ち位置を確立している。

日本においても近年、薬剤師による医師への処方前の処方提案が診療報酬上評価されるようになり、薬剤師の専門性を臨床現場で発揮する環境が整いつつある。しかし、その実践を広げていくためには、基礎薬学の知見を臨床に結びつける教育と人材育成が重要だ。

本シンポジウムでは、日本における薬剤師のさらなる専門性発揮を目指し、基礎薬学の臨床活用を基盤としたアカデミック・ディテリングの推進に関する取り組みを紹介する。基礎薬学研究者の立場から、薬学教育へのAD導入の経緯や資料開発の経験を、また臨床系教員の立場から、アカデミック・ディテラーとの協働によるAD実践研究について報告いただく。これらを通じて、今後の薬学教育と薬剤師の役割の在り方について議論したいと考えている。

薬剤師の未来を変える！ 基礎薬学を活かすアカデミック・ディテリング

現状の課題：世界のスタンダードと日本の状況

海外では40年の実績

10年 20 30 40

日本では始まったばかり

近年評価され始めた段階

**個別最適化された
処方へのニーズ**

米国などでは薬剤師が薬物治療に責任を持つ重要な役割

薬剤師の専門性を活かし、より質の高い医療を提供する好機

未来への解決策：基礎薬学を臨床に活かす

解決の鍵は「アカデミック・ディテリング」

科学的根拠に基づき、医師へ処方提案を行う専門的な活動

推進に向けた3つの試み

教育の開始

資料開発

臨床現場での共同研究

#アカデミック・ディテリング

#基礎薬学の臨床活用

#薬剤師教育・専門性の進化

一般シンポジウム

S58

マルチモーダル AI と機械学習が導く創薬・DDS・医療 AI の次世代展開

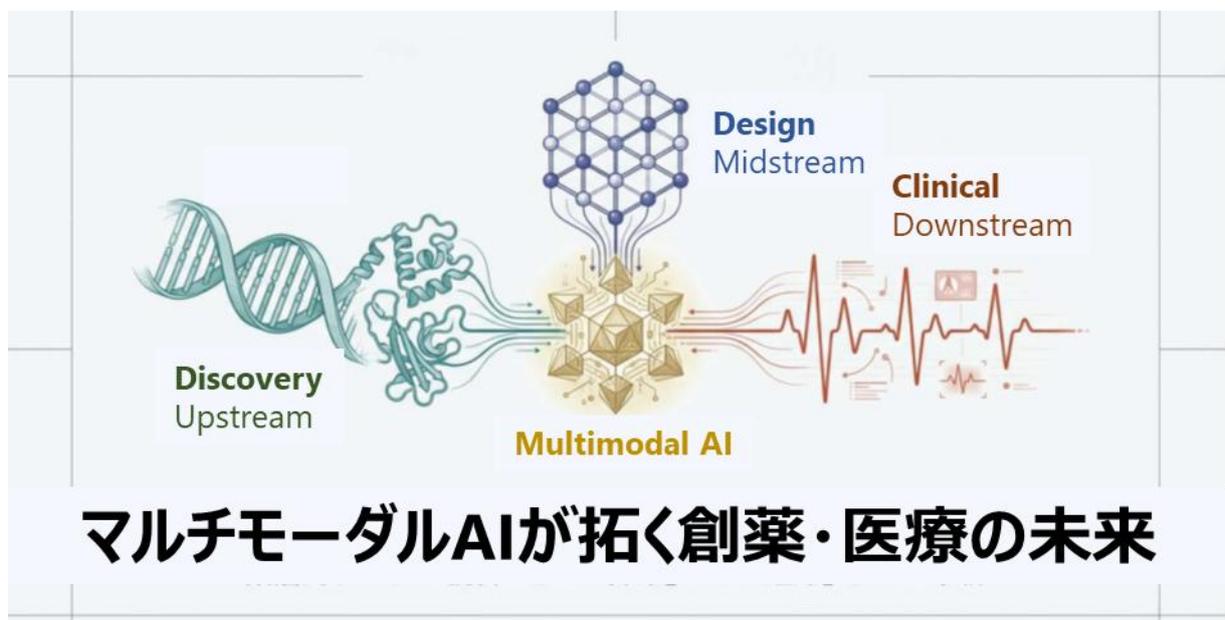
オーガナイザー 有馬 英俊 (第一薬大薬)、関嶋 政和 (東京科大情理)

2026年3月29日 09:30 ~ 11:30

第18会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A202)

近年の創薬・ドラッグデリバリーシステム (DDS)・医療分野における研究では、化合物の化学構造、タンパク質の立体構造、オミクス情報 (遺伝子や代謝などの網羅的な生体情報)、細胞応答、ウェアラブル機器から得られる時系列データなど、性質の異なる情報を横断して扱う局面が急増している。こうした多様なデータを同時に統合し、研究の意思決定に直結する知見へ変換する鍵が、マルチモーダル AI と機械学習である。本シンポジウムでは、標的探索から分子設計、DDS 合理設計、ヘルスマニタリングまでを貫く「統合 AI」の最前線を、具体的な研究事例として提示する。

関嶋政和 氏 (東京科学大情理) は、タンパク質と化合物の結び付きに関する情報を手がかりに化合物を生成する生成 AI モデルと、遺伝子情報や文献を読み解いて標的タンパク質候補を推定する言語モデル活用を紹介し、「標的同定」と「分子設計」を接続する道筋を示す。山西芳裕 氏 (名大院情報) は、疾患関連のマルチオミクス、タンパク質立体構造、化合物情報を融合する基盤技術により、治療標的探索、分子設計、薬効・副作用予測を一体として扱う枠組みを提示する。有馬英俊 氏 (第一薬大薬) は、シクロデキストリン超分子 DDS を対象に、分子認識の物理化学的評価から細胞応答 (遺伝子発現) 予測までを統合し、データ駆動で設計指針を抽出するアプローチを示す。加納 学 氏 (京大院情報) は、血糖値・心電図などの時系列生体データを対象に、将来値予測とデータ合成の技術を紹介し、AI による個別化ヘルスマニタリングの実装可能性を議論する。このように本シンポジウムでは、異なる種類のデータをまとめて解析し、創薬の設計や医療の現場に生かす統合 AI が、次世代の医薬品開発と個別化医療を加速する基盤技術となる可能性を示す。



マルチモーダルAIが拓く創薬・医療の未来

#マルチモーダル AI

#創薬

#個別化医療

一般シンポジウム

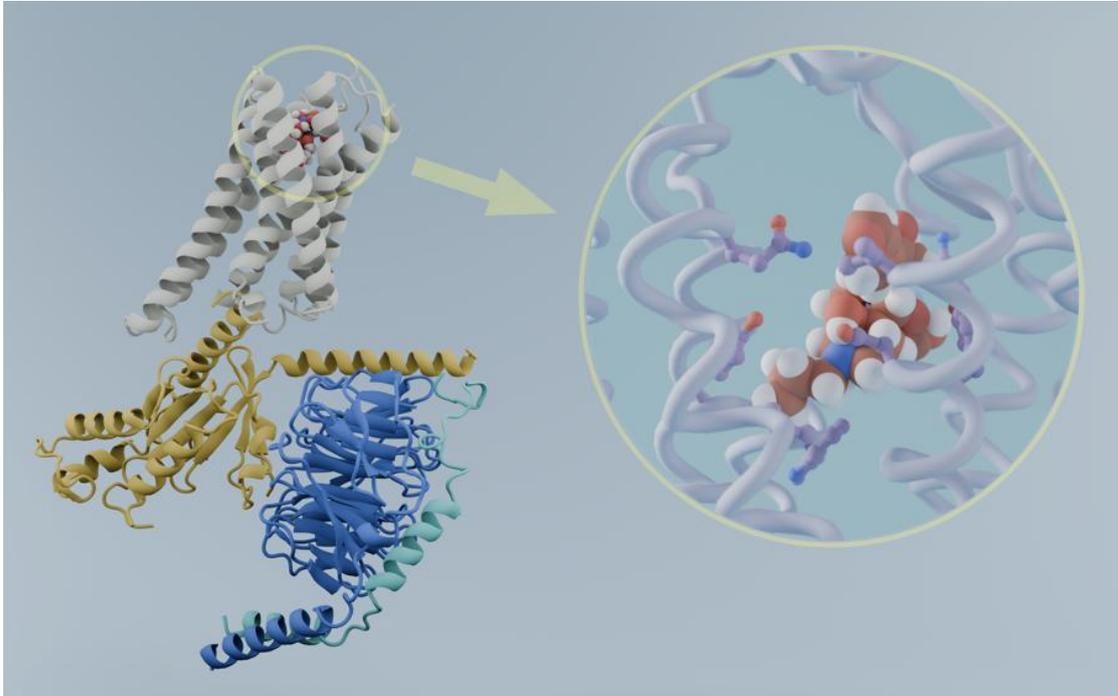
S59

GPCR 薬学 2.0：先進技術が拓く新たなフロンティア

オーガナイザー 齊藤 毅（筑波大医学医療系／国際統合睡眠医科学）、
寿野 良二（関西医大）

2026年3月29日 09:30～11:30

第19会場(第3学舎1号館A棟 [3F] A301)



私たちの体の機能を調節し、現在使われている薬の約3割が標的とするGタンパク質共役型受容体（GPCR）は、現代医療における最重要のタンパク質ファミリーである。この分野は長年研究されているが、実はまだ結合する物質が不明なオーファン受容体をはじめ、その機能の多くが謎に包まれている領域が数多く存在する。これらは、いまだ治療法のない疾患に対する「未知なる鉱脈」として世界中で注目を集めている。一方で、近年のクライオ電子顕微鏡技術の飛躍的な進歩により、これまでは霧の中にあった受容体の原子レベルの姿が鮮明に見えるようになり、あたかも鍵穴に合う鍵を作るかのように薬剤を論理的に設計する「構造に基づく創薬（SBDD）」への期待が、かつてないほど高まっている。しかし、真に有効な医薬品を創出するためには、静的な「形」を見るだけでは不十分で、受容体が細胞内の特殊な環境下でどのように振る舞い、薬が結合した瞬間にどのようなシグナルを伝達しているのか、その動的な「機能」を深く理解し、実際に薬となる化合物を「創る」プロセスへと落とし込む必要がある。そこで本シンポジウムでは、異なるアプローチを持つ研究者が集い、多角的な視点から次世代の創薬を議論する。「形」と「機能」の両面からターゲットに挑む、分野の垣根を超えた新しい創薬研究の可能性を共有することを目的とする。

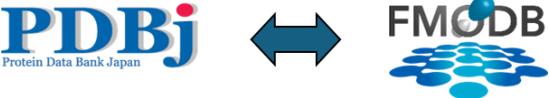
#GPCR

#シグナル伝達

#創薬

一般シンポジウム

S60	<p>薬学部と臨床現場を繋ぐ研究教育による基礎・臨床研究の実践： クリニカルクエスチョンに基づく新規エビデンス創出を目指して オーガナイザー 横山 雄太（慶應大薬）、並木 孝哉（東京ベイ・浦安市川医療センター薬）</p>	
2026年3月29日 13:10～15:10		第07会場(第2学舎4号館F棟 [4F] F403)
<p>病院および薬局で働く薬剤師は、日々の診療の中で「この投与量で良いのか」「この治療法は本当に最適なのか」「もっと良い薬の使い方はないか」といった疑問に直面している。こうした現場の疑問を科学的に解決し、新しい治療法の開発に繋げる研究の重要性は近年ますます高まっている。</p> <p>そのためには、薬学部の学生時代から研究の意義を理解し、薬に関する課題を科学的に探究する力を身につけることが大切である。また、卒業後も学生時代に培った研究への意欲を維持し、医療現場で働きながら継続的に研究に関する教育を受け、実際に研究に取り組むことが、現場の疑問から新規の最適な治療法を創出することに繋がる。</p> <p>本シンポジウムでは、薬学部生、医療現場で働く薬剤師、そして大学教員が連携し、現場の疑問を基盤とした研究を実施するための教育に焦点を当てる。実際に現場の疑問から新しい科学的根拠（エビデンス）が生まれた事例を通じて、研究教育をどのように実践し、その成果を世界に発信したかを紹介する。</p> <p>このシンポジウムが、薬学部と医療現場における研究教育について考える機会となり、実際の研究活動へ踏み出す具体的な一歩に繋がることを期待している。</p>		
#現場の疑問	#研究教育	#科学的根拠

S61	<p>タンパク質立体構造の次の展開：PDBj×量子化学×AIの連携 オーガナイザー 加藤 幸一郎（九大院工）、福澤 薫（阪大院薬）、本間 光貴（理研）</p>	
2026年3月29日 13:10～15:10		第17会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A201)
<p>タンパク質の立体構造は Protein Data Bank に登録され、世界中の研究者に用いられている。近年では、AlphaFold に代表される立体構造予測も盛んに行われており、ひとたび構造が得られれば、計算科学による精密解析も可能である。このため、現在の研究者がアクセスできる構造情報は飛躍的に増大している。一方、日本発の理論手法であるフラグメント分子軌道(FMO)法は、タンパク質全体の量子化学計算を可能にするだけでなく、タンパク質-リガンドやタンパク質-タンパク質間相互作用の詳細な相互作用情報を取得できるため、構造の理解や論理的創薬に適している。これまでに、スーパーコンピュータを利用して8万構造以上のタンパク質構造の全電子計算を実施し、FMO データベース(FMODB)として2019年から一般公開している。</p> <p>本シンポジウムでは、FMODB の概要やデータ構造を解説するとともに、AI の活用、構造生物学研究への展開、さらに日本蛋白質構造データバンク(PDBj)との連携について、最新的话题を紹介する。これらを通じて、今後の展開について議論する場としたい。</p>		
		
#タンパク質立体構造	#量子化学計算	#AI 連携

一般シンポジウム

S62	創薬・製薬に活躍する分析化学の最前線～分析系若手シンポジウム 2026～	
	オーガナイザー 高山 卓大 (立命館大薬)、古庄 仰 (静岡県大薬)	
2026年3月29日 13:10～15:10	第18会場(第3学舎1号館A棟 [2F] A202)	
<p>新しい医薬品を生み出すためには、培養細胞や動物、ヒトから得られる試料を分析し、投与した薬そのものや代謝物、たんぱく質など、さまざまな成分を計測することが重要である。これにより、薬が体の中で引き起こす変化を生命現象として捉えることができ、その理解が創薬の加速につながる。どれだけ精密かつ正確に測れるかは、その後のデータ解釈の質に直結するため、新しい測定方法の開発が継続して求められている。近年は測定装置をはじめとする科学技術が大きく進歩し、1つの細胞の中の変化の測定や、診断と治療を同時に行う画期的な方法が大学から生まれている。一方、製薬企業では、こうした先端技術を実際の現場で使える形に整え、薬づくりのさまざまな場面で活用している。本シンポジウムでは、薬に関わる研究を多様な視点から進めている若手研究者4名を、大学と企業から招き、講演いただく。将来の薬づくりに欠かせない「分析」について、分野や立場をこえて議論を深める。</p>		
#分析	#創薬・製薬開発	#分野横断

S63	生体膜のサイエンスが切り拓く異分野融合研究	
	オーガナイザー 大澤 昂志 (阪大院薬)、原 雄二 (静岡県大薬)	
2026年3月29日 13:10～15:10	第19会場(第3学舎1号館A棟 [3F] A301)	
<p>生体膜は『くすり』の体内動態(吸収、分布、代謝、排泄)において重要な役割を果たしており、特にくすりの細胞膜透過性はその有効性の発揮に直結する。また、生体膜は細胞内外の界面として、くすりに限らず、物質やエネルギーの授受にかかわるため、生体膜が織りなすさまざまな生命活動の根幹に関わる現象を解明し、理解することは、創薬研究のみならず、医学、生物学、バイオテクノロジーなど、多岐にわたる研究領域の発展につながる重要な課題として認識されている。</p> <p>そのような背景のもと、オーガナイザーを中心に異分野融合研究により、生体膜のサイエンスを化学および生物学の側面から切り拓く学術変革領域研究(B)「膜透過学」・「しなやかさ生物学」が現在進められています。今回の第146年会にて、『生体膜のサイエンスが切り拓く異分野融合研究』と題し、これら二領域の合同シンポジウムを開催し、4名の研究者から最新の研究成果についてご講演いただく。本シンポジウムにより生体膜研究のさらなる発展だけでなく、化学・生物学・薬学・医学など広範な“膜”のサイエンスを融合した新興領域の創出につながることを期待している。</p>		
#生体膜	#膜透過学	#しなやかさ生物学

一般シンポジウム

<p>S64</p>	<p>食品安全行政を支えるアカデミアの人材育成に向けて オーガナイザー 浅野 哲（食品安全委員会）、高江 慎一（消費者庁食品衛生基準審査課）</p>	
<p>2026年3月29日 13:10～15:10</p>		<p>第20会場(第3学舎4号館D棟 [3F] D302)</p>
<p>薬学は、化学物質による生体への作用を基盤とする学問である。その研究分野は医薬品だけでなく、化粧品、食品、環境分野にまたがる。特に食品安全分野においては、残留農薬、添加物、かび毒、重金属、放射性物質、環境汚染物質、いわゆる健康食品等を対象とされてきた。これらについて、リスク評価に求められる毒性評価や生体内および環境中動態、曝露評価等が行われている。さらに、リスク管理に求められる試験法・分析法の開発や摂取量調査等についても、薬学研究者が中心となって科学的な知見の収集等が進められてきた。</p> <p>食品安全行政においては、リスク評価を担う食品安全委員会の専門調査会、リスク管理を担う一つである消費者庁の食品衛生基準審議会の部会において、様々な分野の有識者が参画して議論が進められているところであり、今後の食品安全行政の議論を担う薬学研究者の拡大に向け、より多くの研究者の参画が期待される。本シンポジウムでは、行政の各種会議や研究事業・調査事業等におけるアカデミアの役割を紹介し、今後の人材育成を考える機会としたい。</p>		
<p>#食品安全行政</p>	<p>#アカデミア</p>	<p>#人材育成</p>



大学院生・学部生シンポジウム

GS01	薬系博士人材育成の現状と今後の展開 ～学生が探る「優秀な博士人材とは？」～ オーガナイザー 池川 馨（東京薬大院薬）、松村 清香（東京薬大院薬）、 山内 勇輝（東京薬大院薬）	
2026年3月27日 13:10～15:10		第03会場(第2学舎3号館 E棟 [2F] E201)
<p>薬学領域は日々著しい進展を遂げており、求められる専門性はますます多様化・高度化している。こうした背景のもと、医療・創薬現場が直面する複雑な課題に対応するためには、次世代の研究者やリーダーの育成がこれまで以上に重要となっている。このような状況を踏まえ、博士学生には、高度な研究能力に加えて幅広い分野で応用可能なトランスファラブルスキルの習得が望まれている。しかし、具体的に「どのような能力を、どのように身につけるべきか」といった明確な指針は少なく、これについて議論する場も不足している。本シンポジウムでは、研究行政機関担当者1名と現役博士学生3名をシンポジストとして招き、各所属機関における博士人材育成に関する取り組みや、学生視点から見た課題を共有し、その上で優秀な博士人材の在り方を探る。なお、日本薬系学会連合との共催シンポジウム(JS05)と連続して開催することで、学生、アカデミア、行政、製薬企業、医療機関などの多角的視点から博士人材に求められる資質や支援の在り方について提案する。</p>		
		
#次世代博士人材	#トランスファラブルスキル	#薬学人材育成

GS02	化学物質曝露による次世代に対する毒性評価とその展望： 影響予測と予防戦略の構築に向けて オーガナイザー 芹澤 杏萌（阪大院薬）、橋爪 美萌（横浜薬大院）	
2026年3月29日 09:30～11:30		第08会場(第2学舎1号館 A棟 [5F] A501)
<p>現代社会では、医薬品、食品添加物、農薬、環境汚染物質など、様々な化学物質が生活環境中に存在しており、老若男女問わず、これらへの日常的な曝露を完全に避けることは困難である。一方で、こうした化学物質が人の健康に負の影響を及ぼすことが数多く報告されており、特に、妊娠期や発達期の曝露は、流産や早産、子どもの発達への影響につながる可能性が懸念されている。さらに近年では、妊娠期や発達期だけでなく、妊娠前の親が受けた化学物質への曝露が、子どもの世代に影響を及ぼす可能性も注目されている。このような次世代への健康影響を予測し、将来的なリスクを低減していくためには、化学物質がどのように作用するのかを調べ、明らかにし、その仕組みを理解することが重要である。</p> <p>本シンポジウムでは、生殖や発達の過程に対する毒性（生殖発生毒性・発達毒性）に焦点を当て、化学物質がもたらす影響の解明に取り組む大学院生による最新の研究成果を紹介する。これらの発表が、化学物質曝露による生殖発生毒性・発達毒性の理解を深めるとともに、次世代への健康影響について予測や予防の観点から考える契機となることを期待する。</p>		
#化学物質曝露	#次世代影響	#リスクの予測と防止

大学院生・学部生シンポジウム

GS03	<p>薬学の学びをかたちにする： 病態解明から臨床現場の課題解決まで多領域で挑む若手研究</p> <p>オーガナイザー 糸数 柊人（徳島大院医歯薬）、川端 崇義（岡山大病院薬、岡山大院医歯薬）</p>
2026年3月29日 09:30 ~ 11:30 第09会場(第2学舎1号館 B棟 [4F] B401)	
<p>現代医療における未解決の課題に対し、薬学は多角的な手法でアプローチを続けている。本シンポジウムでは、薬学生や薬剤師ら4名の演者が、それぞれの視点から基礎から臨床にわたるテーマで成果を発表する。具体的には、基礎領域から、膵臓がんの増殖におけるプロサポシンの機能や、血管内皮細胞ERK5の大動脈疾患発症への関与について、また創薬・臨床領域からは、深層学習を使用したHER2陽性乳がんの薬剤耐性克服を目指すドラッグリポジショニングの試みや、臨床現場のニーズに即した経口抗がん薬の簡易懸濁法の有用性評価など、多岐にわたるトピックを取り上げる。異なるバックグラウンドを持つ演者と参加者が交わることで、自身の専門領域を超えた新たな気づきを得るとともに、明日からの研究活動への示唆を得る機会を目指す。</p>	
#若手研究	#領域横断的気づき

日本薬学会第146年会のシンポジウム

日本薬学会が企画するシンポジウム、組織委員会が企画するシンポジウムのほかに、本学会の会員が企画するシンポジウムが3種類あります。

大学院生・学部生シンポジウム (GS)

日本薬学会学生会員による企画のシンポジウムです。

ジョイントシンポジウム (JS)

日本薬学会の会員が、他の学会の会員と合同で企画するシンポジウムです。

一般シンポジウム (S)

日本薬学会の会員によるシンポジウムです。

一部、日本薬学会部会の独自企画によるシンポジウムもあります。



日本薬学会キャラクター ナガイ博士

大学院生・学部生シンポジウム

<p>GS04</p>	<p>若手研究者が拓く次世代モダリティにおける新規 DDS 戦略</p> <p style="text-align: right;">オーガナイザー 竹内 ほか (阪大院薬)、平田 剛 (京大院薬)</p>	
<p>2026年3月29日 13:10 ~ 15:10</p>		<p>第08会場(第2学舎1号館A棟 [5F] A501)</p>
<p>普段何気なく使っている薬が体の中でどうやって働いているか想像されたことはあるだろうか。口から投与された薬は消化管から吸収され、血管に入って全身に広がり、薬の標的となる場所でその機能を発揮することで治療効果が生まれる。注射で投与した場合も、血流に乗って標的に届くことで作用する。また、薬が意図しない場所でその機能を発揮してしまった場合、体に悪影響を及ぼす副作用が出ることもある。そこで、投与された薬が標的の周辺に、より多く、長い時間にわたって留まることで、治療効果を高めて副作用を軽減する戦略が重要である。このような体内での薬の動きを制御する技術・戦略をドラッグデリバリーシステム (DDS) と呼び、様々な研究を通して開発された DDS 戦略が医薬品に実際に応用されている。</p> <p>ところで、昔は薬と言えば、小さな化合物が主流であった。小さな化合物はその単純な構造のため、作製や取り扱いが技術的に比較的容易である一方で、機能・作用もまた単純である。これに対し、近年、タンパク質や核酸、生きた細胞をはじめとした従来の化合物とは異なり大きく複雑、あるいは取り扱いの難しい物を、様々な機能・作用の期待できる新たな薬として利用することが研究され、一部実用化され始めている。薬の技術的分類としてモダリティという言葉が使われ、従来の小さな化合物は既存モダリティ、近年の新しい薬は次世代モダリティと呼ばれている。これらの次世代モダリティにおいては、その分子量やサイズの大きさ、水への溶けやすさや安定性、取り扱いの容易性（あるいは使用における簡便性）といった特徴的な性質から、消化管における吸収されにくさや、体内への持続的供給及び標的部位への送達が困難な点などが課題となっている。</p> <p>本シンポジウムでは、このような次世代モダリティの薬物送達の課題に向き合う6人の大学院生に、自身の研究成果を発表していただく。</p> <div style="text-align: center;"> </div>		
<p>#次世代モダリティ</p>	<p>#ドラッグデリバリーシステム (DDS)</p>	

大学院生・学部生シンポジウム

<p>GS05</p>	<p>分解してなんぼ！ 次世代型タンパク質分解誘導薬創出への若手の学際的挑戦 オーガナイザー 秋月 慶乃（星薬大院薬）、大澤 陽（岡山大院医歯薬）</p>	
<p>2026年3月29日 13:10 ~ 15:10 第09会場(第2学舎1号館 B棟 [4F] B401)</p>		
<p>標的となる細胞内タンパク質を狙って壊す「タンパク質分解誘導薬」は、これまでの“働きを止める薬（阻害薬）”では狙いにくかったタンパク質にも作用できる、新しい創薬技術として注目されている。特に、PROTAC（標的に結合する部分と、分解のスイッチを入れる部分をつないだ分子）や分解タグ（分解されやすくする目印）を使う技術の進歩は目覚ましく、化合物の設計・合成、どれだけ分解できたかの確認、分解が起こる仕組みの解明、さらにコンピュータ計算を使った分子設計の改良など、さまざまな分野にまたがって発展している。</p> <p>本シンポジウムでは、こうした研究の第一線で取り組む大学院生が、タンパク質分解誘導薬の合成から、細胞の中で何が起きているのかという仕組みの理解に至るまで、多角的なアプローチで得られた最新の成果を紹介する。専門の異なる若手研究者どうしが活発に議論し、新しいアイデアや共同研究のきっかけを生み出すことで、次世代の分解技術や新しい医薬品づくりの発展につなげることを目指す。本シンポジウムが、世代や分野を超えた研究者が気軽に交流できる場となり、これからの創薬研究に向けた新しい流れを生み出すきっかけになることを期待する。</p> 		
<p>#タンパク質分解誘導薬</p>	<p>#PROTAC</p>	<p>#若手研究者の挑戦</p>

系別一般学術発表演題数

第 146 年会の一般学術発表の件数は以下のようになっています。

系	口頭発表	ポスター発表
化学系薬学	414	541
物理系薬学	95	253
生物系薬学	250	580
環境・衛生系薬学	49	197
医療系薬学	222	602
その他	19	71

(2026 年 3 月 4 日現在)

一般学術発表の発表番号の読み方

口頭発表

[日付] - [会場] - [午前 / 午後][発表順]

(例)27-03-am01

→ 3月27日、03 会場で午前の一番目の発表

ポスター発表

[日付][会場] - [午前 / 午後][パネル番号]

(例)27-51-am-01

→ 3月27日、51 会場で午前に 001 番のパネルに掲示

※末尾に S が付いた演題は学生優秀発表賞審査対象者です。

キーワード一覧

本誌掲載要旨のキーワードを五十音順にまとめました。

AI 連携	S61	ビッグデータ	S30
BINDS	S11	ファインバブル	S28
CBD	S04	フェンタニル	S01
DNA コード化ライブラリー (DEL)	S15	ベクター	S45
Drug delivery system	S33	ペプチド	S50
GPCR	S59	ヘルスケアエコシステム	S56
in vivo 解析	S22	マイクロプラスチック	S17
NAMs	S47	マルチモーダル AI	S58
OECD テストガイドライン	S37	ライフイベント	PS01
Pharmacist-scientist	S53	リバーストランスレーショナルリサーチ	S53
THC	S04	リン脂質	S36
アカデミア	S64	レギュラトリーサイエンス	S03, S12, S21
アカデミック・ディテールング	S55	レドックス創薬	S44
ウイルス感染症	S31, S46	ワーク・ライフ・バランス	PS01
エコシステム	S16	ワクチン	S45, S46
カルコゲン	S44	安全性評価	S18, S47, S52
ケミカルバイオロジー	S26	異分野融合	S31
ケモインフォマティクス	S23	遺伝子治療	S45
シグナル伝達	S59	遺伝要因と環境要因	S25
しなやかさ生物学	S63	医薬品	S35
スタートアップ	S16	医薬品開発	S05, S46, S47
ストレス応答・適応	S44	医療と社会	S01
セルフメディケーション	S38	医療応用	S28
タスク・シェア/シフト	S56	医療機器	S52
タンパク質科学	S26	医療人	S54
タンパク質複合体	S34	栄養素	S08
タンパク質立体構造	S61	英語による講演	IS01
ドラッグ・リポジショニング	S39	加齢依存的疾患	S19
ナノプラスチック	S17	科学的根拠	S60
ナノ粒子	S02		

キーワード一覧

核酸	S50	若手研究者	S21, S24
核酸医薬	S27	若手薬学研究者	PS02
学際的連携	S13	小型魚類	S22
学生ピッチ	S06	消化管内環境を再現した <i>in vitro</i> システム	S33
器具・容器包装	S42	食中毒予防	S13
基礎薬学の臨床活用	S55	食品安全行政	S64
規格基準	S42	心毒性	S30
共有結合	S26	神経疾患	S19
健康	S08	神経発達症	S25
健康・医療	S03	診断	S03
健康・医療イノベーション	S12	人口減少	S56
研究教育	S60	人工知能 (AI)	S23
研究公正	S05	人材育成	S54, S64
現場の疑問	S60	人材活躍支援	PS01
個別化医療	S58	人生 100 年時代を支える基礎研究 .	S19
恒常性の破綻	S09	生殖発生毒性	S35
抗がん剤	S30	生体恒常性	S29
抗体・ペプチド	S07	生体バリア	S20
抗体医薬品	S18	生体膜	S63
国際交流	IS02, IS03	生体模倣システム	S37
再生医療	S39	生命科学支援	S11
最先端創薬化学	IS01	生薬学	IS03
最先端有機合成化学	IS01	製造分析技術	S27
産学連携	S05, S15	創薬	
脂質メディエーター	S36	OS01, S10, S16, S22, S58, S59	
脂肪細胞	S09, S49	創薬・製薬開発	S62
脂肪酸	S36	創薬イノベーション	S12
持続可能な開発目標 (SDGs)	S17	創薬スクリーニング技術	S15
自己集合	S34	創薬化学	S23
自主基準	S42	創薬科学	S39
疾病予防	S08	創薬研究	S31
実験動物代替法	S52	創薬研究支援	S11
社会実装	S37		

キーワード一覧

創薬展開	S20	物理系薬学	S41
体内動態	S29	分子創製	S24
胎盤	S43	分子動態	S07
大麻	S04	分子輸送システム	S07
第3期評価基準	S32	分析	S62
地域医療薬学	S54	分野横断	S62
中分子	S50	保健機能食品	S38
超分子のアプローチ	S33	膜小胞	S02
天然物	S02	膜透過学	S63
天然物化学	IS03	薬学アントレプレナー	S06
天然物生合成	S34	薬学教育	S10
疼痛緩和	S01	薬学教育の未来	S06
動物 3Rs	S35	薬学教育第三者評価	S32
特異体質性	S14	薬学研究者育成	PS02
内因性生理活性物質	S29	薬剤師・アドバイザースタッフ ..	S38
内部質保証	S32	薬剤師教育・専門性の進化	S55
妊婦	S43	薬物治療	S43
脳発達	S25	薬物治療学	IS02
博士学位取得	PS02	薬物性肝障害	S14
反応性代謝物	S14	薬物送達システム	S28
肥満	S49	薬物動態	S18
肥満症	S09	薬理学	IS02
病院薬剤師	S53	有機合成	S24
病態解明	S20	有毒植物	S13
品質評価	S27	量子化学計算	S61
物理化学	S41		

日本薬学会第146年会(大阪)年会ハイライト

2026年3月5日発行

編集・発行 公益社団法人 日本薬学会 広報委員会, 第146年会組織委員会

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-12-15 TEL: 03-3406-3322

日本薬学会 URL: <https://www.pharm.or.jp/>

第146年会 URL: <https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/pharm146>

© 2026 The Pharmaceutical Society of Japan